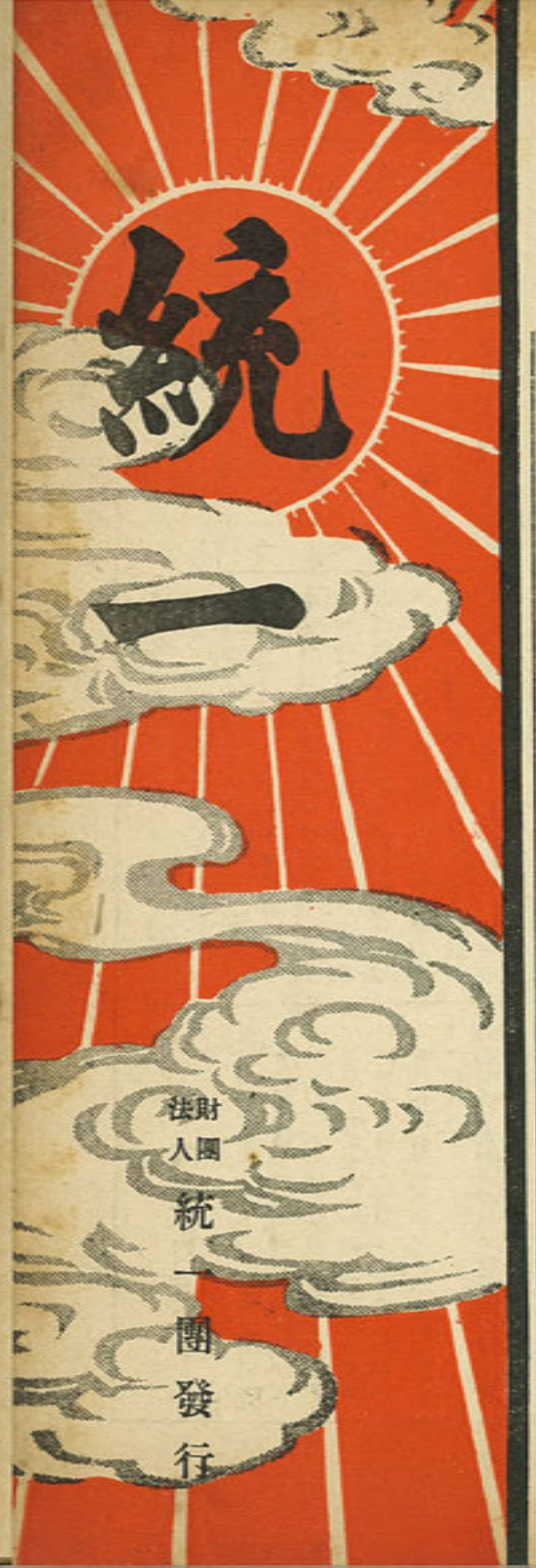


目次

佛教の根本と其の應用（其十二）……本多日生
開目鈔講話（承前）……小林一郎
理想と現實……守屋貫教
本尊曼陀羅の意義（五）……河合陟明
追孝第一義……礒部滿事

記事

○本部團報　○福島支部報
○團費誌料寄附金及維持費領收

大藏經要義續篇（其十六）……本多日生

第四十四年八月號

18/10-26

財團法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間內ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歷史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自覺會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ每月統一ト敎トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一 佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　**第二** 我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　**第三** 此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　**第四** 時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　**第五** 小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文敎ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト敎化トヲ守持スル事是レナリ

敎旨ノ正明　研學ノ潤達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル敎學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ願望スル所ナリ

本團畧則

◎目的　本團ハ日蓮敎學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根蔕ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布敎並ニ敎化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎維持員　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ每年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎贊助員　一時金百圓以上又ハ每年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎正團員　一時金參拾圓以上又ハ每年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラル、方ヲ正團員トス

◎入會　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎誌友　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

佛教の根本と其の應用

（其十二）

本多日生

佛教の超出

そこで先づお釋迦樣の有難い事を左樣にして考へて行くことが出來れば、それで佛敎の根本思想が明になつたと言ひ得ると思ふ。茲に佛敎の應用を考へて行かなければならぬのでありますが、最初に申した通り、佛敎は根本を明にすると同時に、應用の勝れて居るところに長所があるので、卽ち法華經でもいきなり方便品といふものが出て來る位で、方便の應用といふこと、そこに又佛敎の秀でたる所がある。眞實を說くことに於て根本を突止め、應用に於て自在にして能く世を救ひ、人を救ふのである。その眞理の側と應用の側と兩面とも能く揃うて居る所に佛樣の尊さがあるのである。卽ち方便知見波羅蜜と言つて、方便波羅蜜と知見波羅蜜といふ兩方を具へて居る、それは法華經の方便品に『方便知見波羅蜜皆已具足』と說かれて、この兩面を具足せられて居る、その方便波羅蜜の應用といふことを本

當に考へなければならぬ。

今までの佛教のやり方は、これも應用と思つてやつたのではありませうが、いろ〳〵の宗旨が分裂して來た。そこで私が正直に考へると、今までの應用は甚だまづい事が多いと思ふ。一つは哲學風にズツて行く場合には信仰を輕んじたり、一つは信仰に進んで行く時分には餘りに低級になつたり迷信になつたり、日本だけで考へても、現世所謂主義に流れたり、未來厭世主義に流れたり、虛無恬淡な人生を無視したりするやうな宗旨といふものは、大體佛教應用の着想が間違つて居る。そんな粗末な行き方は碌な者がやつたのではないと私には言ひたいのである。『お前は偉さうに言ふけれども、佛教を應用する上に於てそんな着想の置き方といふものは無い』と私には考へられる。この事は私がモウ少し生きて居つたならば、この議論を整頓して、スツカリ書物に書いて置くつもりであるが、必ず私の議論の方が宜いといふことがわかる時が來る。今居る人にはわかるまい、今の人は佛教のことに精しい人が居らぬから、いくら言うてもつまらぬ事ばかり言うて居つて駄目である。併し私が多年佛教を研究した結果、今此處で言ひ居るやうな事は相當價値ある議論として自分だけは考へて居るのである。決して出鱈目を言つて居る譯ではない。

大體佛教を應用するのに、あまり哲學の方に行けば華嚴宗であるとか、或は法相宗であるとかいふやうな理窟ばかり言ふことになつてしまひ、信仰を說けば淨土門のやうな具合に唯だお有難主義になり、

所謂主義に行けば何でも擔ぎ出して婆羅門教見たやうなことになつて居る、そんな事はあるべきものではない。佛教を少し落付いて調べたならば、決してそんな事に行く筈はなかつたと思ふ。全く成つて居らぬ。これは法華經を調べて阿含經を調べない罪と申して宜からう、法華經と阿含經を拔きにしての佛教といふものは、眞に佛教を學んだとは言はれないのである。これだけの事でも非常な大眞理で、いくら時代が經つても變らぬ事だと確信するのである。

今日佛教が多少の復活を意味して來たといふことはこれは生溫いやうではあるけれども、非常な大きな事實である。昔佛教が盛であつてそれが衰へて來た、今少しばかり復活の曙光が見えたと斯う申すがこの曙光といふことは非常な大きな事實であつて、私は非常な喜びを以て迎へなければならぬと考へて居る。何故かと申せば、昔は佛教が盛であつたやうに見えるけれども、今言ふ現世所謂主義のやうな佛教が非常に多かつたのである。又未來厭世主義の宗教、或は超然的に世間を餘所に見てしまつたやうな宗教、或は道德を說いても極く低い因緣話くらゐのことであつて、佛教の眞の道德が應用された譯ではない、佛教の眞の宗教の意味が應用された譯でもない。どうもその具合が甚だ拙かつたと思ふ。それは前に言ふ通り民族の程度が低い爲である。無論坊主もその民族の中のものであるから、つまらぬ坊主が多かつたであらうが、坊主だけが特につまらぬのではない、坊主よりもモット世人の方がつまらぬ者があつた爲に、斯ういふことになつてしまつた、その罪は民族にある。東洋民族がこの結構な教を有つ

て居りながら、これを活用することを怠つて、西洋の基督教のやうな粗末な宗教でもあれを發揚發展せしめて、擅に活躍せしめて居る。さうして東洋には斯の如き偉大なる宗教を有ちながら、その教を引下げ〳〵してこれを發揚發揮し得なかつたといふことは、實に東洋人が釋迦如來に對して申譯のないことである。今後眞に眼醒めて復活するといふ場合には、決して單に耐禱主義の宗教を求めるのではなく、厭世的の宗教を求めるのではない。超然的の宗教を求めるのではない。卑近なる間に合せの因緣話の道德宗教ではない。モット根柢深き本當の人間生活の根本をこの宗教に依つて築いて行く。道德としては道德の中心基礎を宗教に置かう。宗教としてはそれが人間生活の全部を率ゐて、さうして未來死んだ先までも助けて行くといふやうに、注文だけは堂々として居る。まだその熱心が足らぬけれども、注文書の書き方だけは從來の日本佛教の盛大であつた時よりもよほど優れて居るのである。そこが吾々の喜ぶ所である。

信仰と道德

この喜ばしい機運に向つて佛教の應用を誤たぬやうにして行くには、最初に申した通りに、その時代に對應して佛教が活躍するやうに、これを宣傳するのが佛教を護る所以である。たゞ舊い株を守つて時代に後れるやうなことをするのは佛教を滅す所以であることは先師先輩も申して居るのであるから、この新に勃興せんとするところの機運を捉へてこれを導き、さうして將來に光明あらしめる佛教として宣傳しなければならぬと思ふ。

その場合にはどういふことが主たる問題になつて來るかと言へば、やはり第一はその宗教の信仰と道德の關係である。この佛教がその信仰の性質を吟味して、それが宗教の意味合として整頓したものであつて、その信仰の力の現れが道德生活を開拓して行き、個人としても社會としても國家としても、その信仰がどういふ風に人生を善良化して行くかといふところの、その力の如何に依る譯である。死んでからといふことが先に出て來る譯ではない。又御祈禱主義に出て來る譯ではない。この人間を人格的に見てさうしてその信仰といふものが、どれほどに個人、家庭、社會、國家の上に役立つかといふことが大事な問題である。そこに佛教の應用を試みて行かなければならぬ。たゞお有難主義であるとか、御祈禱主義であるとか、死んでから……と言つて居つては前の注文書に合はないからして、今後の世の中から言へばそんなものは要らぬ。餘所に行つて買手を探して見よといふことになつて、佛教は活躍されないのである。

佛教と理智の滿足

モウ一つはどうしても人智の進歩といふものは日と俱に進むのであるから、殊に哲學、科學、人間の

學問の力といふものが、宗教といふものを評論する時代である。總ての事を無條件では受容れるものではない。それが眞理の研究に於て認められるかといふことがどうしても非常な强い力で現はれて來る。哲學の承認を得ざるところの宗教、科學の眞理を無視するところの宗教といふやうなものは將來到底存續繁榮するものではない、それは世の中には馬鹿も澤山居るからして、その中に迷信のやうなくだらぬものとして殘つては行くかも知れぬけれどもそれは世の中の力ではないのであつて、さういふものは數は多いやうであつても、その時代その社會を支配するものではない。それは蛆虫見たやうなもので、唯附いて來るに過ぎないものである。その社會を支配する勢力といふものはやはり學問である。今頃學問無しに威張つて居る奴がある。『學問など面倒くさい』と言つて居るけれども、それは何百年も前の事ならいざ知らず、今日はそんな無鐵砲が通るものではない。やはり今後は人智の啓發といふことは世界の人文の上に於て認められて來る。そこには科學の知識、哲學の知識、合理的の說明といふものがなければ、迷信のやうな根據の無い、傳統的の思想からお有難いといふやうなことでは、宗教といふものは今日以後存續し得るものでない。その眞理の批判の前に提供して、遠慮無くこれを研究して吳れと言つて喜んで理智を迎へる宗教でなければならぬ。

さういふ風に考へると、一面には佛教を信ずるものがある代りに、一面には始終眞理の上から批判をする者が列んで居る。哲學や科學の方から冷かに評論をしようとする一類の人が狙つて居る。一方には道德上から考察をする教育者のやうなものがあり、一方にはこれを煽動する政治家が睨んで居る、一方には極端なる唯物的の思想から宗教を呪ふ者が居るといふことを考へて一座の說教でもしなければ、今後佛教を發揚せしむることは出來ないと私は思つて居るのである。その代りにそれがうまく行きさへしたならば、その效果といふものは、實に唯だ佛教が盛になるといふ位の事ではない。それに依つて一切が救はれ、本當の文明の建設が成立つところの大事業である。

理想文化と佛教

以上は先づ大體であるが、その中に實際問題として起つて來るのが、今日の所謂社會問題と稱するものであつて、卽ちいろ〳〵經濟上の問題とか、或は資本勞働の關係とか、地主小作の關係とか、その他社會の落伍者に對する社會政策の問題、それが政治上にも現れて來、宗教上にも影響を及ぼして來る、その場合に佛教がその社會問題を如何に按排して行くかといふ、社會問題と佛教の關係を十分に考察しなければならぬと思ふ。

いま一つは政治といふものも、その枝葉の事は關係が無いけれども、根本といふものは非常な關係のあることであつて、釋迦如來は始終政治に關しても意見を發表せられて居るのであるが、それは政治の根本に於てはやはり文教といふものがなければならぬ。卽ち政治に對する教育もあれば、社會教育とい

ふものもあり、政治が携はるところの人心教化といふものがある。これは單に宗教宗派の仕事ではない。一國としては卽ち人心を指導啓發するところの方針といふものが樹たなければならぬ。それが今までではどちらかと言へば、一つは西洋の唯物主義に來た科學の知識、一つは從來の淺薄なる道德觀念、この二つで日本はやつて來て居る。これが日本政治の民心善導の方針である。教育勅語を如何に振廻しても、それは儒教と西洋科學の思想を出でないのである。それ故にそこに缺陷があり、淺薄な所があつて現代といふものは斯ういふ有樣になつたのである。人間といふものは決して唯だ獨りでに腐るものではない。時代が斯の如き狀態に陷るといふものは、政治上の着想に淺薄な所があるからして起るのである。これはどうしても佛教の應用の上に於ては、その政治家を善導しなければならぬ。佛教徒自身が政治家になる必要はないが、政治家に接觸を執つて、斯の如き低劣なる淺薄な思想を以て政治をやるといふことはいかぬ、科學の知識と儒教だけを以てやることはいかぬ。モット深みのある思想を國民に教へて行かなければならぬ、それには卽ち佛教を加へたるところの文化でなければならぬ。この意味合は屢々私が主張して居る事でありますが、どうしても理想の文化と佛教といふことに就ては政治家を啓發するといふことが佛教應用の上に大事である。

國家と佛教

それからモウ一つやはりそれに關聯して居るのは國家思想と佛教である。いろ〳〵の思想問題の中には、或は文藝の上から來たり、或は政治上から來たりして、どうも國家觀念といふものに動搖を來さんとするのであります。それ故にこの國家觀念を適當に指導して行くといふことが佛教の大任務である。單に誤つたる國家思想に囚はれてはいかぬけれども、國家を理想的に導いて、さうして國民を愛國の精神に導き、その國家の行動が進んで世界の文明を啓發するといふやうな、世界の文化と國家の關係、國家と佛教の關係といふものは圓滿に教へて行かなければならぬ。それが今日はどうもうまく行つて居ないと思ふ。國家の方面に於ても無論うまく行つて居ない。佛教の應用に於ても、國家と言へば、單に國家に屈從したやうな變屈な思想に流れ、或は國家を無視して人道主義を說いたり、慈悲博愛を說いたり擴がつて行く場合には維が弛んでしまふし、狹まつて行く時分には硅角が出來たり、どうも佛教の應用が正當を缺いて居る。これは佛教に對する研究が足らぬからして斯ういふことが起つて居るのである。阿彌陀經だとか般若心經だとかそんなものだけ讀んで居つて、佛教の應用を試みようといふことがそもそも間違ひである。そんなやり方では佛教といふものは、今言ふやうに擴げれば維が弛むし、狹めれば硅角が出來るやうになる、モツと能く佛教を研究して、國家問題と佛教といふことを本當に指導して行かなければならぬ。

更に擴げれば人類全體の文化を建設する理想と佛教といふこともこれは重大な問題である。さうして社會問題と佛教、國家問題と佛教、その中には人生の實際生活を指導して行くところの人格中心の佛教の效果を明にして、宗教の絶對の權威を示し、一方には哲學と連繫を執り、科學と連絡を執つて行くといふ風に、ちようど現代の時勢に適した要求を滿たして進んで行かなければならぬと思ふ。

斯樣に考へて來た場合に於て、左樣な意味は今更吾々が事新しく發見するのでなくして、お釋迦樣が最初佛教を組立てられたお考は、皆それが整頓して居つた。不思議なことに私が今まで申述べ來つたやうなことを考へて言ひ居るのも、時代の要求を認めたといふよりも、實はお經の研究から入つて、佛教は哲學或は科學を尊重した宗教であり、道德を重んじた宗教である。さうしてそれの意識信仰が整頓して居る。尙ほ社會問題、國家問題、人類問題に於て佛教は各々意見を有つて居る、それを衆生濟度と言ひ、世間安立と釋尊は申して居るのである。一人出世すれば一切衆生を救ひ、世間を饒益して安樂ならしめんと釋尊が言ひ居る中に、今申す國家も社會も人類も、道德も哲學も宗教も皆な包含して、釋尊はこの偉大なる教を立てたものだといふことに考へられるのであります。

その應用の意味合をお經に基いて、將來は斯ういふ具合に佛教が進んで行くべきものである。斯ういふ所に佛教の價値があるといふことは次回に詳しく申上げようと思ひます。

開目鈔講話（承前）

小林一郎

多寶如來及び我身集むる所の化佛、當に此意を知るべし。諸諸の善男子、各諦に思惟せよ、此は爲難き事なり。宜しく大願を發すべし。諸餘の經典、數恒沙の如し、此等を說くと雖も、未だ爲難しとするに足らず。若須彌を接て佗方無數の佛土に擲げ置んも、亦未だ爲難とせず。若佛滅後惡世の中に於て能此經を說かん。是則爲難し。假令劫燒に乾たる草を擔ひ負ふて、中に入て燒けざらんも、亦未だ爲れ難とせず。我滅度の後に、若此經を持て一人の爲にも說かん。是則爲難し。諸の善男子我滅後に於て、誰か能く此經を護持し讀誦せん。今佛前に於て、自ら誓言を說け等云云。第三の諫勅也。第四、第五の二箇の諫曉提婆品にあり、下に書くべし。

それから第三番目に、又重ねて同じ寶塔品の中に說かれてあります。『多寶如來及び我身集むる所の化佛當に此意を知るべし』これはお釋迦樣が仰しや

つた。お釈迦様が一切の人を教へ導くといふこの慈悲の心持は、總ての佛と同じ心持、共通な心持である、佛といふものは皆同じ心持なのである。だから『諸佛同道』と天台大師が言つて居る。佛様といふものは皆同じだ、それは場合に依り、國に依つてその佛様の様子も違ひ、言葉も違ふけれども、佛様は大慈悲の心持を有つて居らつしやる。又佛様は教を説くに當つては、一番初めに方便の教を説いて、だん〳〵進んで眞實の教をお説きになる、これは變らない。だから諸佛道を同じうするのであつて、何處の世界の佛様でも、過去、現在、未來、いつの時代の佛様でも、佛である以上は道を同じうせられるのだ。斯ういふことを天台大師も言つて居るのでありますが、その心持がやはりこゝに現れて居るのでありまして、お釈迦様は、そんな自分一人が一切衆生を佛にする爲に心を碎くのではないぞ、多寶如來もその心持である、十方世界の佛様もその心持である。だから方々から集つて居る有ゆる佛が、皆自分のこの心持は知つて居らつしやる筈だ。さうして又この教がたゞ今の世だけでなくて、末法の世に至つて一切の人を救ひ、一切の人を教へ導くといふ大きな力を有たなければならぬといふことを、自分が考へて居る譯であるが、この自分の考へて居ることを、多寶如來も他の佛も皆知つて居らつしやる、佛のお心持といふものは同じナンだ。だからお釈迦様の心持に叶つたやうな行ひをすることが、即ち一切の佛の心持に叶ふことであつて、一切の佛を信ずると同じ結果になるのだ、斯ういふ事を言はれるのであります。斯ういふ風に言はれるから、吾々は一生懸命になつて、心の力、身の力を殘らず打込んで、さうしてお釈迦様の教を信ずるといふ心持になれるのであります。

併ながら斯ういふ風に佛の教といふものは尊いものだけれども、何分にも末の世に至ると人の心が險

悪になつて來るから、いきなりさういふ教は弘まらない。それは人間には皆佛性があつて、佛と同じところの尊い心持を有つて居るから、結局これは教が弘まるのだけれども、その教の弘まる時期が來るまでにはなか〳〵容易ではない。それだから『宜しく大願を發すべし』この教を世に弘めるといふやうなことは、普通の願望ではないから、普通の考ではいけない、大願を發さなければならぬ。大願といふのは、一切の人を救はう、佛の尊い教を普く世に弘めて一切の人を救はうといふ、この必死の大願を發さなければならぬ。さうしてどんな困難があつても、その困難の中を越えて行かうといふ考を有たなければいけない。『諸餘の經典數恒沙の如し、此等を説くと雖も未だ爲難しとするに足らず』諸餘といふのは法華經以外の經典、それが恒河の沙の數ほどある、これは佛の説かれたことだから皆それ〳〵尊い意義を有つて居るが、併しさういふ經を説いて、人に納得させるといふことが難かしいと言つても、その難かしさは多寡の知れたものである、未だこれを難しとするに足らぬ。この法華經といふ、佛の魂を打込まれた教を世に弘めて、一切の人にこれを信ぜしめるといふことの方が、どの經を弘めるより非常に難かしいのである。又須彌山といふのは世界の中央にあるところの大きな山であるが、その須彌山を接つて、これを他の娑婆世界以外の所に擲げ出してしまふといふやうなことは、これは人間の力で出來る事でない。迚も出來得ない事と思ふかも知れぬけれども、それもまだ〳〵難かしいとは言へない。若し佛の滅度の後の惡世の中に於て、人間の心が極度に惡くなつて行くのでありますから、その時代に於て能くこの經を説く者があるならば、それは非常に骨が折れることであつて、教を説くといふことは非常に難かしい。そこで難かしいから、その難かしいのを敢て冒してやるといふ決心があつてこそ、初め

てこの教が世に弘まるべきものである。又『假使劫燒に』劫燒といふのはこの世が末になつて來ると、火事が起つて世界中のものが皆燒けてしまふといふことが、印度の昔からの言傳へでありますが、さういふ時代に、乾いた草を背負うて火の中に入つて火傷しないといふことが出來るか。それは難かしい、迚も出來さうもない。併しさういふ難かしい事でもまだ難かしいとは言へない。我が滅度の後にこの經を持つて一人の爲にも說くといふ事をするなら、その方が寧ろ難かしい。だから餘程これは難かしいといふことを覺悟してやらなければならぬ。

これは今までにも屢々申上げたやうに、容易く出來ることは、本當に善い事ではない。品物を一つ拵へても、良いものは念を入れて手間を掛けなければ出來はしない。この間も申したことでありますが、種を播いて芽が出るのでも、六日か七日で芽の出るやうな草花は、冷たい風が吹けば直ぐ枯れてしまふ、強い陽に中れば直ぐ凋れてしまふ。種を播いてから半年も經つて芽の出るやうな、大きな楠、檜、公孫樹といふやうな木は、これは何十年、何百年も保つ、それだから骨の折れるものでなければ本當のものではない、容易く大きい立派な事をしようといふことになると、それは出來得ないことである。それと同じで、法華經といふ教が非常に勝れた教であつて、それが佛の魂を打込まれた教である以上は、これを世の中に弘めることに力を盡すといふ、その力を盡すのは、普通の力の盡し方でこの教が弘まるべきものではないのでありますから、これは難かしい事である。非常な困難を冒すといふ覺悟を以てやらなければいかぬといふことを繰返して言はれるのであります。

それで『諸々の善男子、我滅後に於て誰か能く此經を護持し讀誦せん』此の經を信じてその信仰を持續けなければならぬ。たゞ持續けたら宜いといふもの

ではない、又讀誦しなければならぬ。繰返し〳〵この經を學んで、さうして自分のものにする。又自分が繰返し學んで居れば、自然に周圍に善き感化を與へることになつて教が世に弘まるのでありますから、さういふ心持を有たなければならぬ。『今佛前に於て自ら誓言を說け』斯う仰しやつて、末の世に至つて法華經の弘まらんことを望まれた。これが『第三の諫勅なり』諫勅といふのはしつかりしろといふ意味でありまして、うつかりしてはいけない。たゞ教を弘めるといふ意味ではない、諫めるといふ意味でありまして、油斷をしてはならぬし、うつかりしてはいけない。餘程しつかりしなければ迚も出來はしないといふやうな誡める意味を籠めて、この教を弘めることを命ぜられたのでありますから、これを諫勅と申します。斯ういふやうに三つの教といふものがあつて、三回も繰返して、末法の世に至つてこの法華經を弘めろといふことを命ぜられた。それから第四、第五の二つの教があるが、これは提婆品にあるので、それはこの間も申すやうに、一つは『惡人成佛』でありまして、提婆達多といふ惡人が後に佛に成るといふこと、いま一つは『女人成佛』でありまして、龍王の女が法華經を學んで佛に成るといふことであります。この惡人成佛、女人成佛といふのは、前にも申したやうに一切の人間が皆佛に成るといふことの證據ナンであります。人間は皆佛性が有るので、どんな境界に墮ちて、どんな惡い事をして居ても、どんな間違つた事をして居ても、心の底に有る佛性が消えて無くなるといふことはないのだ、或る機會が來て或る緣が熟すれば、必ず佛に成れるに違ひない。その位な尊いものであるから、命に懸けて弘める譯であります。いゝ加減にして廢れてしまふやうな教なら、或は人に依つては救はれないやうな教なら、命に懸けてこれを世に弘める價値は無いか知らんけれども、

惡人も成佛する、女人も成佛する、一切の人間が皆成佛するところのその道を敎へたところの敎であるから、これを命懸けで末の世に弘めなければならぬといふことになるのであります。その第四、第五の二つの敎は、これはモツと後に於て提婆品にあるのであるから、その提婆品の事は姑く措いて、後の方書かゝうと思ふ。

此經文の心は眼前也。靑天に大日輪の懸が如し、白面に黑のあるに似たり。而ども生盲の者と、邪眼の者と、一眼の者と各謂自師の者、邊執家の者は見がたし。萬難をすてゝ道心あらん者に記止めて見せん。

『此の經文の心は』、卽ち末法の世に至つてこの法華經が普く世に弘まらなければならぬといふことを仰しやつたこの意味は『眼前なり』眼前といふのは、ハツキリする筈だ、眼の前に能く考へて見れば、誰の心にも本當に解る筈だ。蒼空に大日輪が懸つて居るが如くに、或は色の白い人の顏の上に黑い黑があるやうなもので、誰が見ても能く判る。佛樣はこれを明かに仰しやつて居るのだから、これを信じなければならぬと云ふことは誰でも納得の行ける筈である。併ながら『生盲の者』生れながらにして眼が見えない者、それから心に迷ひが滿ちて能く解らぬ者、或は『邪眼の者』間違つた敎に首を突込んでしまつて、間違つた敎から出ることが出來ない爲に、正しい敎を聞いても鑑別けの附かない者、或は『一眼の者』一眼といふのは眼が片方と云ふことで、心が偏つて居る意味であります。一方にばかり心が偏つて正しい道を辨へないやうな者。それから『各謂自師の者』自分で自分を師だと思つて居る者、これは非常に多い。自惚れてしまつて、自分一人で考

へてモウこれで解つたと思つて、一人できめて居る者。それから『邊執家の者』邊執家といふのは、主としていろ〳〵な宗旨に執はれる者をこゝでは言つて居るやうであります。邊執といふのは必しもさういふことではありませぬけれども、こゝでは『自分は眞言宗だから眞言宗だ』『自分は念佛宗だから念佛宗だ』斯う言つて、一つの宗に入るとその宗に執はれてしまつて、そこを離れることが出來ないやうな者、さういふ者を邊執家と言つております。

さういふ者は、それは日蓮が今茲で言つたくらいのことでは解らぬかも知れぬけれども、併しさういふ者でも無論佛性を具へて居るのだから、いつかの時には解るのだらうけれども、なか〳〵それは急には解らないかも知れぬ。併ながら『萬難をすてゝ道心あらん者に記止めて見せん』有ゆる艱難を物ともしないで、さうして道心のある者、本當の道心といふものは、道を行ふと云ふやうな簡單なものではない、道心といふのは佛に成らうと思ふ心持であります。それが道心であります。佛道を求める心、それが本當の道心と云ふことです。佛道を求める心といふのは、自分が佛の境界になつて一切の人を救うまでは何處までも骨折つて行かう、何處までも信心して行かうと思ふ。これが所謂道心であります。佛道を求める心であります。その心持は又別の言葉で言へば『大乘心』であります。

これは前にも申したかと思ひますが、大乘・小乘の區別といふものは、だん〳〵押詰めて行くとそこに歸する。つまり吾々が折角佛と同じ尊い性質を有つて居て、さうして而も佛樣が、自分と等しくして異ることのないやうにしてやらうと仰しやつたのだから、內に考へて見、佛の御精神を考へて見ても、いゝ加減な所でその信心をやめ、いゝ加減な所で研究をやめたのではいけない譯であります。どんなに手間が取れやうとも、この世でいけなければ後の世

でも宜いから、佛に成るまでは努力をやめまいといふ心持を起さなければ濟まない譯であります。それが所謂大乘心であります、それが又佛道を求める心持であります。だからこれは骨が折れるにきまつて居る。そんなに易しいことではない。それだからその心持がしつかり立つて居なければならない。少し言ひ過ぎるかも知れぬが、大乘の經典を讀んだからと言つても、それは菩薩でもなければ大乘でもない。たゞこの經を讀むことに依つて何か御利益が欲しい、眼の前の都合が好いやうにといふことだけでやるならば、それは道心ではない、それは教を利用する心持でありまして、本當の道心ではない苦であります。道心のある者の爲に自分は言ふのだ、眼の前の事を言つて居るのではない。人間皆佛の境界に行けるのだから、そこの所をしつかりと捉へて、本當の道を求めて行く者があるならば、さふいう者の爲に『記止めて見せん』自分の考へて居ることをスツカリ茲に打明けても宜いと思ふ。斯う言はれるのであります。

西王母が園の桃、輪王出世の優曇華よりもあひがたく、沛公が項羽と八年漢土を爭ひし、穎朝と宗盛が七年秋津島に戰ひし、脩羅と帝釋と、金翅鳥と龍王と、阿耨池に諍へる　此にはすぐ可らずとしるべし。

西王母といふのは、これは支那の後漢の時に出た婦人でありますが、仙人の道を修行して、後に自分が仙人になつて、再び漢の武帝といふ人が庭で遊んで居る所へ出て來たといふ話がある。その時分にこの仙人の國に出來たところの桃を持つて來て武帝に勸めて、これは何千年に一度しか實らないものだと言つたといふ話がある。それから又『輪王出世の優曇華』輪王といふのは轉輪聖王でありますが、轉輪聖王といふのは前に申しましたからこゝでは簡單にしますが、非常に德の勝れた王樣で、さういふ德の勝れた王樣があると、天がこれを護つて、輪寶といふ不思議な寶を授けられる、その寶を授けられた王樣の向ふ所は皆その德に懷いてしまふ、斯ういふ話がある。これは印度の婆羅門時代からの言傳へでありまして、その轉輪聖王が出る時には優曇華といふ華がその前兆として咲くといふことである。だから西王母の園の桃といひ、輪王の出るところの前兆として咲いた優曇華といひ、これは容易に得られないものである。その容易に得られないといふことは何に譬へたかといふと、法華經の世の中に弘まる時期が容易に得られないといふことに譬へたのである。それはなか〳〵佛樣の魂を打込んで御說きになりました本當の敎が、世の中に普く弘まるといふ時期に、容易に値へるものではない。その時期に今日遭及びその一門の者は値ふのだから、これ程有難いことはない。斯う思はなければならぬ。優曇華の華を見るよりも難かしくて、容易ならぬ時である。その容易ならぬ時に當つて、この法華經を世の中に弘めるのに聊かなりとも力を盡すことが出來たならば、こんな有難いことはない、こんな嬉しいことはないのでありますから、その事をしつかりと考へなければならない。

ところがそこが難かしいのであつて、若し法華經が弘まらなくなつたらどうするか、これをこの後に言はれてあります。若し弘まらなくなつたらどうするか、これは大問題なんです。この藥王品の中にあるのはその問題を言つて居る。『後の五百歲』卽ち佛が滅くなつた後の五百年間にこの法華經を弘めて、さうして『惡魔魔民』いろ〳〵な惡魔に便りを得せしめることのないやうにしろ、斯うある。よく普通には、閻浮提に於て普く流布するといふことだけは書かれて居りますけれども、この經文を見ると、こ

の法華經を全世界に弘めて、さうしていろ〳〵な惡魔が便りを得ることのないやうにしろと斯うあります。それは何故さうあるかといふと、世の中といふものは善か惡かどつちにかなる。世の中が無事であります、大惡人も無ければ大善人も無くて、どうやら無事に通れる、皆同じやうな顏をして、同じやうな料簡で居る。そんなに思ひ切つて善い事もしない、そんなに思ひ切つて惡い事もしない、マアどうやら無事に通れる。ところが世が末になつて來ると、世間の樣子が非常に切迫して居るからさう行かない、どつちかに偏る。惡い事をする奴は思ひ切つて惡い事をする、遠慮も會釋もありはしない。モウ大びらでやる。『ナーニ泥棒するのが何が惡い、賄賂を取るのが何が惡い、こんな世の中になつて來れば仕樣がないぢやないか』といふので、大威張で大手を振つて惡い事をやるでせう。又一方に於ては『これではならぬ、こんなに世が險惡になつたのでは仕樣がないのだから、何とかして正しい道を求めなければならぬ』といふ心持を有つ者が出來る。だから人間が兩方に傾くのであります。今の時代が正しくそれであります、まん中どころではなく、暢氣な事をして居られない。勝手な事をやる奴はどんどん勝手な事をやる。又一方じつと考へて、若しさういふ場合に在つて、眞實の道を求めようといふ心持を起す人があるならば、この人は眞實の人であります。この人は決して行懸りに執はれて居る人ではない。心から求める、世の中の樣子を考へて、『これではならぬ、自分が何とかして本當に善い道を求め、又他の人も何とかして善い道に入れてやりたい』といふ、心の底の要求から正しい教を求めて行くのであります、この人のは眞實の要求であります。『自分の家は念佛だから南無阿彌陀佛だ』『自分の家は法華だから南無妙法蓮華經だ』といふのではない、斯ういふ人は心の底から求めて居る。さういふ心の底から善い道を求めて居る時に、法華經のやうな善い教が與へられるならば、自分の求める所と與へられた教と一致するのでありますから、一生懸命になつてやるでせう。さういふ時に若し法華經のやうな教が弘まらないで居て、つまらない教だけだつたら、その人はがつかりしてしまふ。『こんなに一心に求めるのだけれども自分が滿足する教はないのかナ、道だの教だのと言うてもつまらないものだ、自分を滿足させる教がないのか』といふことになると、折角志を立てた人が一馬鹿々々しいナ』と言つて投出したくなる。さうすれば世の中は惡魔の世になつてしまふ。それだから今は瀨戸際で大變な時であります、法華經が弘まれば世の中は極樂淨土のやうになり、法華經が弘まらないで、つまらない教だけならば、眞面目な人はつまらない教では滿足しないから、世の中はスッカリ駄目になつてしまふ。だからどうかこの教を弘めて、惡魔が勢力を得ることのないやうにしなければいけない、今その岐れ目だ。斯ういふ意味であります。たゞ教を弘めたら宜いといふそんな簡單なものではない。これは大變な戰であります。この戰で若し萬一間違つた方に勝利を得さしたならば、再び世の中は救ふことの出來ないやうなことになる譯であります。

そこで支那では沛公卽ち漢の高祖が、項羽と八年の間爭うて、天下分目の戰爭をして、到頭天下を一統した。日本では源頼朝が宗盛と七箇年の間秋津島、卽ち日本の國で戰つて到頭平家を亡して源氏の世にした。これは本當に天下分目とも言ふべき爭ひであります。今この末法の世に於て法華經が弘まるか弘まらないかといふことはチョウドそれである。又阿脩羅と帝釋天と戰つて、到頭帝釋天が勝つて、阿脩羅は阿耨池といふ池に叩き込まれて勢力を失つたといふことが、印度の舊い言ひ傳へにある。又金翅鳥といふ鳥と龍王とが阿耨池といふ池の所で

評つて、到頭龍王が最後の勢力を得たといふのでありますが、斯ういふやうな事は印度の舊い言ひ傳へでありまして、本當にこの天地の間がまるで顚倒するやうな爭ひだと言はれて居ります。

こんな爭でも『此にはすゝ可からず』今法華經が末法の世に弘まるか弘まらないかといふこと以上大事なことはない。こゝで法華經が弘まらなければ、世の中はスッカリ眞暗闇になつて、一度正しい教といふものが人間界にスッカリ廢れてしまつたら、再び取返しは附かないから、この時ほど大事なことはない。吾々はこの時に生れて法華經を弘めるのだから、實にこれは大事なことと言はなければならぬ。これは一人の人のことぢやない、正しい道がこゝで行はれないといふことになつたら、惡い奴はどんなにでも惡い事をするのです。だから道を世に弘めるには――縱し弘めないまでも、正しい道、正義を維持するといふ上には、それはモウ自分一人の問題ではない。若しも正義を維持する者が無ければ世の中はスッカリ眞暗闇になつてしまふ。その事を考へればこれは非常に大事なことと言はなければならぬ。この事を以て日蓮聖人は御自分のお弟子を勵まされたのであります。

日本國に此法顯るゝこと二度なり。傳教大師と日蓮となりと知れ。無眼の者は疑ふべし、力及ぶ可らず。此經文は日本・漢土・月氏・龍宮・天上・十方世界の一切經の勝劣を、釋迦・多寶・十方の佛、來集して定め給ふなるべし。

今日本の國に於てこれからこの法華經が本當に弘まらなければならぬのだが、この『日本の國に此法顯るゝこと二度也』法華經が本當に顯れたことは二度である。『傳教大師と日蓮と也と知れ』他にはない。何故態々二度なりと仰しやつたかといふと、これも大に考へなければならぬことであります。日本では聖德太子が法華經を弘められた　聖德太子は攝政として法華經をお弘めになりまして、法華經が日本の國に於て弘まる上に於ては非常に御功績があり、殊に太子のお書きになりました『法華經義疏』といふ書物は、今日にも遺つて居つて、今に吾々に非常に大きな教訓をお與へになつて居るのに、何故日蓮聖人がこの事を差指いて、傳教と日蓮と二人だといふことを仰しやつたかといふことを能く考へてみなければならぬ。これは聖德太子の時には敵が無い。聖德太子は攝政で皇太子でゐらつしやるから、聖德太子のおやりになることを誰も妨げをする者はない。誰も反對をする者はない。だから聖德太子の御努力は實にえらいが、マア易々と法華經が世の中に弘まつた。傳教大師と日蓮に至つては敵がある。傳教大師は、それは日蓮聖人ほど殺されさうになつたり、島流しにされるといふことはないけれども、併しその時分奈良の七大寺の者が傳教大師の妨げを致して、朝廷に讒奏致しまして、傳教大師の法華經を弘めるのを妨げるといふやうな事をやりまして、隨分これは恐しい事であつた。その中を越えて行かれたのであるから骨が折れる、骨が折れる事をすれば、後に遺すところの功德も非常に大きい、斯ういふ譯であります。日蓮聖人のことは申すまでもない。法華經が世の中に弘まるに當つては必ず迫害がある。お經の中には、『如來の現在すら猶ほ怨嫉多し況んや滅度の後をや』とあつて、法華經を本當に世の中に弘めれば迫害がある、斯ういふことは仕方がない。その迫害に屈せずして法華經を弘めるといふことが、法華經の行者の態度であります。

斯樣に考へて來ると、法華經が我國に顯るゝこと二度である。傳教大師はあれほどの南都七宗の迫害を凌いでさうしてお弘めになつた。その後に至つて又いろ〳〵な間違つた佛教が起つて、日蓮がこの法

華經を弘めるといふことになると、皆敵になる。併しこの敵に屈せずしてこの法華經を弘めるといふことに依つて、本當に弘まるのだ。

この事を弟子達は能く考へなければならぬ。『無眼の者は疑ふべし、力及ぶ可らず』併し眼の無い者は、日蓮が斯う言つたからといつても疑ふだらう。それはモウ解らない者は仕方がないけれども、本當にしつかり考へて見たならば解る筈だ。今引いたこの經文に依ると、日本の國に行はれて居る佛教の中に於て法華經が一番善い。支那に於て行はれて居るものよりも、印度に行はれて居るよりも、或は海の底の龍宮でも、天上界でも、十方の世界でも、有ゆる所に行はれて居る教の中でどれが一番勝れて居るかと言へば、この法華經より勝れたものはないといふことは、お釈迦様のみではない、他の十方の世界からいろ〳〵な佛様が集つて來て、この證人にお立ちになつたことである。だからこれは非常に大事である。生命の有る者は皆佛性を有つて居るのだから、人間であらうが、天上界のものであらうが、どんなものであらうが、苟も生命の有る者は皆正しい教に依つて救はれなければならぬ。その正しい教がこの世の中に於て數有る中に於て、佛の魂を籠めて說かれたのがこの法華經ナンだから、一切の教の中に於て法華經が最も勝れて居るといふこと、これは十方の世界を通じて又過去・現在・未來を通じて變らないことである。これをお釈迦様がお說きになつた時に、多寶如來が眞實であると言つて證人にお立ちになつた、又十方の世界の佛が集つて證人にお立ちになつた。斯ういふ譯だから、これ程大事な教が末法の世に至つて弘まるといふ以上は、この教を弘める爲に力を盡すといふことが非常に大きなことであり、また大きな喜びでなければならない、斯う言はれるのであります。

これで一段落致しまして、それからまた問答を設けまして、他の宗でも自分の宗が一番勝れて居るといふことを言つて居る、又他の宗でもいろ〳〵なお經を讀むけれども、そのお經が總てのお經の中で一番善いお經であるといふことを言つて居るが、その他の宗の主張と、天台から日蓮に通じての主張との相違が何處にあるか、斯ういふことをこれから更に言はれるのであります。

問て云、華嚴經・方等經・般若經・深密經・楞伽經・大日經・涅槃經等は九易の内か六難の内か。

この華嚴、方等、般若、深密、楞伽、大日、涅槃といふやうな經は、大乘の經典の中に於ては主な經でありますが、その經は九易の内か、六難の内か。これは前に申した寶塔品の中に六難九易といふことがあつて、世の中の難かしいと言はれる事を九つ擧げてその九つはまだ易しい。法華經を弘めるに就いて自ら信ずるとか、人に說くといふ事を六つ擧げてこの六つの事が難かしい。斯ういふので九易六難を擧げてあります。まア口調が良いので『六難九易』と言つて居りますが、つまりその九易の内か、六難の内かといふことは、法華經に比べてどうだといふ意味であります。法華經が一番難かしいお經であるといふことは、一番勝れたお經であるといふ意味でありますから、華嚴經でも涅槃經でも、或は楞伽經でも、深密經でも、皆それ〳〵非常に深い教であると言はれて居るが、これ等と法華經と比べてどつちが上か。この事をモウ一度詳しく聽いて見たい、斯ういふのであります。

答て云、華嚴宗の杜順・智儼・法藏・澄觀等の三藏大師讀て云、華嚴經と法華經と六難の内。名は二經なれども所說乃至理これ同じ。四門觀別見眞諦同の如し。

答へて云ふには、華嚴宗の杜順、智儼、法藏、澄觀といふやうな人は、支那の唐の時代に出て、華嚴宗を弘めた人でありますが、さういふ人は、皆華嚴經と法華經とは六難の内で、どつちも深いものである、その名は二つのやうだけれども、その言つて居ることは一つだ、斯う云ふことを此の人々は論じて居る。これは前にも申上げたやうに、これ等の人は唐の時代に出た人でありまして、天台大師のお書きになつた摩訶止觀法華玄義、法華文句といふやうなものを皆見て居る。天台大師は陳から隋の時に出た人でありますが、これ等の人はそれから後の人でありますから、天台大師の書かれたものを讀んで、例へば天台大師が一念三千といふやうな、人間の心の中を非常に詳しく分類をして、さうして一切の人が佛に成る道を悉しく說き示された。これを讀んで見て敬服してしまつて、さうして天台大師の說かれたことを應用して、これに依つてその華嚴經の說明をしたものであります。だから今この人々の書いた華嚴經の說明は實に能く出來て居る。吾々華嚴經のさういふ本を讀んで見て實に敬服する。實にうまく言つて居る。うまく言つて居る筈です。それは天台大師が說かれた人間の心の中を解剖したやうな說明をスツカリ應用して、さうして華嚴經の說明をしたのだから……。さうして華嚴經も法華經も同じ價値のものだ、斯う言ふ。それならば何で法華經を信じないかといふと、それは同じ價値のものだけれども、お釋迦樣が佛陀伽耶といふ所で修行して覺りをお開きになつて、その時に說かれたのが華嚴經だ、だから華嚴經が根本だ、法華經といふものは寧ろそれをモウ一遍說き直したものである、斯う主張して居るだから決して法華經をつまらないとは申しませぬ。けれども華嚴が一番初めに說かれたもので、後でモウ一遍說き直したものが法華經であるのだから、吾吾は一番初めに說いた根本の華嚴を信じた方が本當である。斯ういふ主張をして居るのであります。これは日蓮上人が他の御書の中で說いて居らつしやるやうに、その說明の仕方は、これは天台大師の說明の仕方を能く應用されて居るのであります。

『四門觀別なれど眞諦を見ること同じさが如し』

四門觀といふのは、これは佛敎の中の大體を別けると四つの點から物を觀て來る、これを四門觀と言ふ四門とは

有門
空門
亦有亦空門
非有非空門

でありまして、大乘でも小乘でも兩方を通じて斯ういふ風に觀れば觀られるのであります。『有』といふのは物の差別の方面を主にして觀る觀方であります。いつでも有といふのは差別の意味です。物を差別的に觀る研究の仕方、これを有門と言ふ。物には皆差別がある、人間にも馬鹿もあり、利口もある。罪を犯す者もあれば佛樣の心持に叶ふ者もあり、又佛の弟子でも聲聞、緣覺、菩薩といふやうにいろいろある。その異ふ方をスツカリ見極める研究の仕方、これが有門であります。

『空門』といふのは、どんなに異つても共通の性質があるといふ、人間の共通な平等な性質を能く見極めて行く方です。こんな惡人でもやはり佛に成ることがある、こんな馬鹿でもやはり佛に成るやうな性質がある。斯ういふ風に共通な平等の方面を能く見極めて行く、それが空門であります。だから有門も一つの觀方であります。空門も一つの觀方であります。差別的な方面も能く見極めなければならぬことであるが、又平等的な方面も能く見極めなければならませぬ。

『亦有亦空』といふのは、差別と平等と兩方面に亘

つての研究、有でもあり、空でもある。差別の方から言へば斯うだ、平等の方から言へば斯うだ。斯ういふ風に南方面に亘つて、いろ〳〵に研究をして行くのであります。これが亦有亦空でありまして、斯ういふ研究の仕方もあつて宜い譯であります。それからモウ一つは『非有非空』といつて、平等だの、差別だの、そんなことをスッカリ超越してしまつてたゞ一つの理がある、斯う考へる。斯ういふ觀方もあるのです。差別とか平等とか言つたつて皆根本は一つぢやないか。たゞ天地の間を支配する絶對の理といふものは一つしかない、この一つのものが差別にもなつて現れゝば平等にもなつて現れる、いろいろ變化もあれば不變化の所もある、何しろ根本は一つだ。斯ういふやうに、一つのものを捉へようといふ方針で研究を致します。それが非有非空であります。

結局それはマア一つの絶對の理をいろ〳〵な方面から觀て行くのでありますが、併し研究をするに就て、差別的方面の研究と、平等的方面の研究と、兩方面を綜合した研究と、それから兩方を超越した一つのものを求める研究の仕方、斯ういふやうに極く大ざつぱに別ければ四種ある。これは大乘でも小乘でもどつちにも亘つて言へることであります。

併ながらこれは眞諦の上に於ては一諦といふのは徹底的の教といふ意味で、いろ〳〵異ふけれども、それは四つの方面から觀て行くのであつて、一つの眞諦、本當の理を見極めるといふ上に於ては同じだ。それと同じやうに、華嚴經も法華經も、經文の名は異ふし、又說かれた意味は異ふけれども、結局佛樣のお心持をその儘打明けて說かれたといふ點に於ては變らない。斯ういふことを申すのが、それが華嚴宗の方の主張であります。

法相の玄奘三藏、慈恩大師等讀で曰く、深密經と法華經とは、同く唯識の法門にして第三時の教、六難の內也。

それから法相の玄奘三藏、これは唐の時代に生れて、唐の太宗皇帝の保護を受けて佛教を世に弘めた人でありまして、その弟子が慈恩大師でありますがそれ等の人の書いたものを讀みますと、この方では深密經が一番の經だと言ふ。これは詳しく言へば解深密經でありますが、略して深密經と申します。この解深密經は法相宗では一番深い經とする。法華經はこれと同じ經だ。唯識といふのは、こゝでは心を主にするといふ意味で、人間の心のはたらきが根本だ、人間の心一つのはたらきに依つて、この世が淨土にもなれば穢土にもなり、天上界にもなれば下らない所にもなるのだから、唯識、この心一つが根本だ、斯ういふ事を說く上に於ては、深密經も法華經も同じことである。斯ういふことを玄奘や慈恩は言つて居る。これも唐の時代の人でありまして、天台大師の本を讀んで居りますので、天台大師の教義を能く應用して深密經の解釋をして居る譯です。これは日蓮上人が他の御書にも言つて居ります。だからこの經といふものは六難の內にやはり入る。難かしい方の教、非常に深い方の教に入ると言つて居る。

さうして法相宗の方では、お釋迦樣の教をお說きになつたのを三つの時期に分けまして、

有時
空時
中道時

とします。一番初めは『有の時』有といふのは、凡夫と覺つた者と區別して說かれた時代。第二番目は『空の時』凡夫でも覺つた者でも結局佛に成れるといふ、兩方を平等に觀て說いた時代。一番終ひが、『中道の時』といつて一つに纏めて、本當に重大な眞實の唯識の所を說かれた時代。斯ういふやうに法

相宗でもお釈迦様の御一代を三つに分けます。それで法華經といひ、深密經といひ、皆それは第三の時期、中道を說かれたものであつて、これは入りにくいものである、難かしいものである。斯ういふ事を言ひまして、法華經が一切經に勝つて居るといふことを此宗では言はないのであります。

これが大に注意すべきことでありまして、何しろ天台大師といふ人が非常に頭腦の優れた人であつたものでありますから、天台大師の本を讀んだ人は、法華經はつまらないものだと言ふ人は無論ない。だから法華經も大事だが、イヤ、華嚴も大事だ、華嚴經も法華經も同じだと華嚴宗では言ふ。法相宗も、イヤ法華經ばかりではない、深密經も同じだと言ふ。天台の言ふことを否定は出來ない。これは天台が非常な力を以て說かれたものでありますから、さういふやうに言ひまして、唐の時代には大體妥協的の態度であります。これから後に言ふ眞言宗だけは

法華經より上だと言ふけれども、それでも後になると、やはり妥協的になつて、ナーニ理窟だけは大體同じだといふやうなことを言ふやうになつて居るのであります。さういふ點に於ては、天台大師が如何に有力な方であつたかといふことが實に能くわかるのであります。

斯ういふ風に諸宗の主張を一通り列べて參りまして、それから日蓮上人が、さうは行かない、いろいろ言ふけれどもそれは一種の妥協であつて、本當の事を言へば法華經以上に出でないといふことは、これはお釈迦様御自身の明かに示された所であるのだから、これを動かすといふことになれば、それは佛意に背き、佛の御精神に背くのであるから、さういふ事をしてはならぬといふ話に入つて行くのであります。

（第二十九講了）

理想と現實

守屋貫教

一、

何人でも理想にあこがれぬものはないであらう、理想とは現實のあるがまゝの自分よりもよりよき狀態の謂である。人々は今日よりもよりよき明日を欲求する、今月よりもよりよき來月を欲求する、今年よりもよりよき來年を欲求する。人生の行路に於てこの理想追求の最も熾烈なるものは青年時代であらう。青年はその前路遙かに理想を描いて不斷にそれを追ひ求めて居る。彼等は來月或は明年その理想の幾分を實現するであらう。然しそれを實現し得た時は、理想はまた遙か遠くに描かれてある。斯くて彼等は只管美しき理想にあこがれて前へ〳〵と進むもの丶如くである。彼等は往々にして醜き自己の現實を顧みることなく唯進みに進むもの丶如くである。さりながら人間はいつまでも青年ではあり得ない、青年から壯年へと進まねばならない、家庭から社會へと進出せねばならない。昔から十で神童十五で才子二十過ぐれば並の人といはれた如く、往々人々に於て青年期は夢の如く破れてしまふ。

壯年期になると、よりよき自我を欲求する點に於て青年期と變りはないのであるが、昔の如くひたむ

きに理想をのみ追ふて進むことは出來ず、現實と理想との葛藤に日は暮れ、多くは現實に推され勝ちでその間に理想追求の意氣も漸く銷磨して老年期へと入るのである。

老年期の人々を觀ると、理想追求の戰場に於ては宛かも刀折れ矢盡きの觀なきに非ず。全くその意氣は銷沈して人生理想なきが如くである。青年は前に理想を描くものとすれば、老年は後に理想を遺棄したものである、青年は理想を前面にして居る、老年には理想が背面して居る。それ故に青年は將來をのみ望み未來をばかり語つて居るに反して、老年は過去をのみ繰言して居る。

以上は理想と現實との背馳に於いていうたのであるが、この事は人生全般に亘る事柄である。人間の生活に關はる事柄である。人は天分も異なりその位置境遇もさまゝ〳〵であるが、その生活に於ては萬人が萬人皆同じである。その生活はこの世界に於て營まれて居る。この世界とは何であるかは必しも凡てが分つて居るわけでないが、生活して居ることは現實である、而も直接の現實である。この現實の生活に於て人々はその出發に於て大なり小なり理想を描いて出發するのであるが、その終に於て理想は達せられず、彼をして正直に告白せしむるならば、人生が失敗であつたと認めざるを得ない事になる。而もその生活も終末になつては再出發することは出來ない、そこに人間の限りなき悔恨と苦惱とがある。

二、

いはば人々の生涯にその生と死とはあるが、そして生は人生の始めであり死は人生の終りであるが、始終はあつても必しも完結はない。多くの人々の生涯は未完結な不完全な生涯である。多くの人々は生れそして多くの人々は死んで行くのであるが、完結した完全な生涯を送つた人は幾人あるであらう。昔さうであつた如く今日も尙同じことを繰返して居るのではないか。それが人間であらうか、それが人間のはかなき運命であらうか。私共の周圍を望めると、さうした暗い心持になるのであるが、昔ねく人間の歷史を見渡すと斷じてさうでない。

私共は歷史を見渡すと、古今といはず東西といはず、完全なる人生を送つた幾多の全人格を見る私共に緣の近い東洋にしても、三千年その間に生息した東洋にしても完全なる人生を送つた幾多の聖人を見出す。印度の釋尊が第一にさうであつた。釋尊は修行して大悟徹底してそして五十年の間人類を教化して、その最後の息を引取る時でも、須跋陀羅といふ梵士を教化して、八十歲の二月十五日の中夜寂然として滅して行かれた。その死するや薪盡きて火の滅するが如きものであつた。孔子の如きもその弟子三千人六藝に通ずるもの七十餘人、その生涯は全く人類教化に始終したものであるが、その生涯は始あり終ありて、全く完結せるものであつた。その『十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に從つて矩を踰えず』といへるもの、その生涯の完全なるを示せるものでないか。三千年の昔と今日と、印度や支那と私

共と時と處とを異にすれども、同じく私共のやうに地上に生活した人々である。私共の周圍を見渡すと草木は天地自然の純なる姿である。春來れば彼等は芽を出し葉は繁り花に咲き出で、秋になると實を結ぶ。自然のまゝである限りそれが彼等の完全なる生涯ではないか。かうした姿が自然の實相の姿ではないか。その多くの完結した姿を春夏秋冬に繰返し〳〵て居るではないか。人間も亦いな人間こそ釋尊や孔子の如く花に咲き出で實を結ぶ完全な生を送るのが、その本然の姿ではないか。唯人間には草木と違つて悲しむべき自由が與へられてあるが故に、その自由に躓づくことに依つて、生を不完全にして死んで行くのであるまいか。

古往今來幾百億幾千億の人類が、宇宙最愛の子であるにも關はらず、その眞理に背いて實を結ばずに死んで行くのは悲しむべき事實である。それで釋尊や孔子といふ聖人は、自分達が完全なる生を送つて人類にその御手本を示したばかりでなく、その完全なる生活は敎となつて未來永遠に人類を敎化して居るのである。

今日の人々は人智が開けた文化が進んだ、釋尊時代は飛行機が無かつた、孔子時代にはラヂオが無かつたと誇るであらう。然しながら私共各人の生活を考へて見て、果してそれが完全であらうか。私共の生活は充されたる生活であらうか、悔なき生活であらうか。人智はいくら開けても文化はいかに進んでも、私共は依然として敎へられねばならぬ人間ではなからうか。

三、

理想を求めて得ず、現實にも滿足せざる人間を考ふるに、それは孤立のはかなき存在である。宇宙の大生命とは絶緣されたる憐な生命である。これでは實のなる生活を結ぶことは出來ない。佛を如來と呼ぶのは、實相の根本から如實にして來られたからである、宇宙の大生命そのまゝを負うて來られたからである。人間の行く道も斯くの如くでなければならぬ。それと絶緣しそれと孤立して、いかに理想の現實のともがいた處で、その生活が失敗に終ることは當然である。海に浮んで船の力を信ぜず、獨りもがいた處でそれが何にならう。汽車に乘じて獨り走つた處でそれが何にならう。宇宙に生息する人間はこの大生命のまに〳〵生活して行かねばならない。然るに人間は自己といふ小我に立籠り、その力に依りて自ら立たんとする。之を佛敎では顚倒の衆生というて居る、顚倒の衆生とは宇宙の大生命から孤立するの謂である。今日の世界を觀るに、曾て機械文明に誇つたものがその機械に依つて自ら苦む如く、人間の作つた文化に眩惑せられて、その文化に依つて自ら苦むの因を蒔きつゝある樣は、是れ顚倒でなくて何であらう。斯の如きは信のない知識の產みなした所產の故であらう。信から出發しない知識ほど危險なものはない。單なる知識は宇宙を人間の私意の爲めに利用するばかりである。信から出た知識こそ宇宙の大生命を益々〳〵發展する。

私共は顚倒して居るが故に、顚倒を顚倒とも知らず、それを眞實の如く思ひ做して居るが、實相からさながら來られた佛の前には、最もよくその顚倒の樣がハッキリして見えたであらう。それで佛の敎には第一にこの顚倒を指摘されて居る。この顚倒を轉回するには理窟ではいけない、それは信仰である信仰とは隨順することである。私共人間の素直な心戀慕の情が純一無雜な佛意と感應することである。戀慕の情は例へは赤子が母親の乳房を慕ふ如く一筋道でなければならない。

人間は宇宙の大生命から孤立して、理想の現實のと騷ぐから、そこに苦惱もあり顚倒もあるのである　私共人間を生んだ程の大生命である、それは慈悲でなくて何であらう。先づ顚倒の思を轉回して大生命に面奉することが所詮である。宇宙は味へば味ふ程慈悲に溢れて居る、その無限の慈悲は悉く私共のものとなる。そこには滿されぬ事はないであらう不完全はないであらう。私共は大生命と共に安立するであらう。

世界の事にしても、人智が進んだ文化が開けたといひながら、此限りなき豐饒な大生命の中に處して生活難だの失業だのと苦み惱むのは抑も顚倒からではないか。大生命に歸すべきものを人間は勝手に利用せんとするからではないか。その世界の顚倒を取り戻すのでなければ、人類究極の安立は得られないと思ふ。

日蓮聖人の顯されたる
本尊曼陀羅の意義（五）

佛子　河合陟明

結論　**三十三**　人類歷史の上に顯はれたる絕對的二個の大事實と宣言　天壤無窮の寶祚　と　常住不滅の本佛　法華經と大日本國との三大因緣　**其一**　本佛感應の佛道的國體たる本質的因緣　その根本的と相稱的　根本的關係における根源相と現在相　相稱的關係における十五契合的綱目　**其二**　本佛感應の豫言的國土たる傳來的因緣　法華經に顯されたる佛說本緣　佛滅後における諸先哲の豫讖　**其三**　本佛感應の統一的國家たる發揚的因緣　本化上行日蓮聖人の出現　五綱敎判と三大秘法　法華經的顧業國家としての大日本　大法光宣と輪王統治の祖判と明敎　天業經綸の大使命

三十三　人類文化の黎明が　アジアの地に發してより　茫々古今　幾千載、悠久極まりなき史上に於て　古來幾多の國家　民族　及び　文化的諸勢力が　洋の東西に亘り　測るべからざる隆替興亡を　繰りかへしつゝある中に、巍然として　萬古不滅の意義と　靈力を　發揚して　遏く人類の間に　儼存し來り、而て　人文歷史の永遠の將來を　豫言する　根本的二個の　大事實　大宣言がある。

一は　人類生活の現實的方面　卽ち　統治經綸道に於て　悠久不滅なる　絕對國家の君臨の事實であり、

一は　人類文明の心靈的方面　卽ち　大覺成佛道に於て　久遠永劫なる　絕對靈格の儼存の事實である。

前者にあつては

葦原の千五百秋の瑞穗の國は　是れ吾が子孫の王す可き地なり、宜しく爾皇孫就て治すべし、行ませ、寶祚の隆えまさむこと　當に天壤とともに窮り無かるべきものなり。

との　大宣言が　天地六合の中心たる　天照大神によりて發

せられ　こゝに　神國大日本が肇造せられて　神孫　此土に降臨し　神裔永しへに寶祚を傳へて　萬世一系　天壤ともに窮り無く　常に　慶を積み　祿を重ね　正を養ひ乃神乃聖　無限の御稜威を發現して　廣大無邊の仁德を四海に布きたまひ、下には　億兆一心　世々厥の美を濟して　天壤無窮の皇運を扶翼する忠良の臣民あり、以て　天業を恢弘して　天下に光宅し　六合一都　八紘一宇の大理想を　人類世界に實現せらるゝことゝなつたのである。

後者にあつては

我れ成佛してよりこのかた甚だ大いに久遠なり　壽命無量阿僧祇劫にして　常住不滅なり

との　大宣言が　三世十方の中心たる　本佛釋迦牟尼如來によりて發せられ　こゝに　大法界は無始以來　この本佛智悲の光明によつて緣起し、而て　この本佛無窮の智悲はまた　無窮なる淨用妙化を起して　三身常住　三世益物の大事實となり、卽ち　本佛は　三世常住　十方周遍　法界遍滿の　實在身にして　しかも　積功累德　久修業所得の　功德身であり、その　無窮の智悲は發射して　上に宇宙の實相を證得し　下に　衆生の心行を照破し、境智冥合　智悲一體　そこに大悲護念の鑑機三昧力　衆生を愍念して秒時も捨てず、その大慈意輪の感應發しては　無限神通の妙用として　身口の二輪　形聲の兩益となつて現れ、

こゝに　本佛は間斷なく衆生に隨應して　これを教化教濟せらるゝ　大慈悲の活動を存續しつゝ、三輪の妙化　常恒の恩德窮り無く、この本佛の威神を稟けて夙に教化せられ居る無量の佛弟子諸菩薩等は　また久遠の昔より　この本佛の衆生濟度の大佛事を翼贊し、法界の全人類　一切衆生　また同じく　この本佛の智悲を發射せられて　頓に無上菩提心を發し　その本有の佛性を開顯して　佛子の自覺に立ち　一佛道中に來至住して　信行精進　以て　現當二世無限の靈應を蒙ることとなつたのである。

かくの如く　人類生活の上に顯れたる　二個の　絕對無上の大事實と大宣言とは

常住不滅の本佛　と

天壤無窮の寶祚　との　二大事實を指し、而て　この大事實を光顯せられたる　二大宣言　最高最貴の二大文字とは、

一は　法界遍滿の本佛が　この人界に出現して　宗教的教濟の絕對道たる　佛教を開道し、その眞實開顯の大法たる法華經に於て、自ら　我は是れ本佛にして　久遠實成　無始實在　常住不滅　なることを敎詔したまひたる　大梵音を指し、

一は　六合照臨の神明が　神孫を降臨せしめて　神國大日本を肇造し、統治經綸道に於ける　絕對の大權を擁立せらるゝに當り、寶祚の隆昌を祝福し豫言して　天壤無窮の神勅を　宣示したまひたることを指すのである。

かくして　宗教教濟道の絕對位　と　統治經綸道の絕對位　とは、その根源的靈德を　宇宙的教濟の本佛　と　國家的守護の祖神　とに發し、而て　その現在相を　宗教にあつては　萬古を一貫して常住の本佛に置き、國家にあつては　また　祖神の神裔たる萬世一系の天皇に置き、而て　この　本佛と祖神　本佛と天皇　或は卽ち　法華經と大日本國體との間には、

一　本質的因緣　卽ち　日本國家の法華經的本質論

二　傳來的因緣　卽ち　日本國家の法華經への接觸論

三　發揚的因緣　卽ち　日本國家の法華經的誓願論

の三大方面にわたり　先天的不可思議の　因緣　約束を結び、歷史的發妙の　照應　契合を綫り成してゐるのである。

(一)　まづ抑も　法華經と大日本國體との　本質的因緣とは何であるか。これを　一言にして言へば、

本佛感應の佛道的國體　或は卽ち　開顯的國體　といふべきである。而てこれには　根本的關係と　相稱的關係との二面を存するのであつて、その　根本的因緣關係とは

常住不滅の本佛は　天壤無窮の寶祚を現じたまふ

ことを先づ信受すべく、而てこれには　更にその　根源相と現在相との二面を開いて　その一貫の次第と意義とを

(三)かにすべく、卽ち

法　と　國　との　根源相にあつては

宇宙的　宗教的　教濟道に於ける　絕對的靈格の　本尊たる

本佛は

國家的　統治經綸道に於ける　絕對神聖なる　神明と　現じたまふ　ことを指し、

次に、法　と　國　との　現在相にあつては

宇宙の絕對として　常住遍滿なる　宗教本尊の本佛は

國家の絕對として　統治の大權を體現せらるゝ　萬世一系の天皇と　現じたまふことを指し、かくて卽ち

本佛の應現たる　祖神　と　天皇　或は

神明　皇室は　本佛の應現なり

一言にして言はゞ

本佛應現の皇室　といふことが

佛教と大日本國體との　本質的因緣に於ける　根本的關係である。

次に　本質的因緣に於ける　相稱的關係　或は　契合的因緣關係とは　これを　差の各綱目として並列することが出來るのである。

1　靈德の淵源

本佛釋尊の靈德

天照大神の神德

2 靈妙の緣起
本佛常照　佛界緣起の法界
天祖授國　天孫降臨の神國

3 萬古一貫
久遠常住の一佛
萬世一系の皇統

4 肇成の根柢
積功累德　久修業所得の本佛
肇國宏遠　樹德深厚の皇室

5 常恒の恩德
絕對的救濟の大用に於ける　靈格の內容　救護の妙相
たる
本佛の三身常住　三世益物　三輪の妙化の佛德
絕對的統治の大權に於ける　天德の表徵　皇位の御璽
たる
皇室の三種の神器　と　その御精神たる
積慶　重暉　養正　乃神乃聖の皇德

6 精神的感應
本佛は主師親三德の大恩教主にして　與點久遠以來
我等衆生との間に　慈父と愛子との關係　を存し
皇室はまた主師親三德の大恩德主にして　歷世一貫
億兆萬民との間に　義は君臣にして　情は父子の關
係　を存したまふ

7 不磨の大憲
本佛護念の內證にして　敎化菩薩　衆生信行の『妙
法』
皇祖皇宗の遺訓にして　臣民祖先の遺風として遵奉す
る『皇道』

8 大義名分
一佛絕對　諸佛統一の　大義名分敎
一君萬民　忠孝一本の　大義名分國

9 國體組織
一聖＝本佛　諸賢＝諸菩薩　衆凡＝一切衆生　三位一
體にして　一佛道を成じ　常恒　本佛の法力この間
に來至住して　各々　道を行じ　道を成じて　德化
遍からざるなき　法界國家本有の妙相
一聖＝天皇　諸賢＝文武の忠臣　衆凡＝善良の人民
三位一心にして　一國家を成じ　絕えず　天皇の御
稜威發現して　各々　分に遵つて　皇謨を翼贊し
以て　天壤無窮の皇運を扶翼する　皇道國體本然の
妙相

10 德化の妙用
本佛中心　正法護持　佛性開發　佛道精進の『衆生』
皇室中心　德兆一心　世々濟美　精華發揚の『臣民』

11 國土莊嚴
本佛敎化　『菩薩』充滿　大寶莊嚴の　本國土
皇運扶翼　天の益人『大御寶』充滿の　皇國

12 一大德敎
本佛奉戴　經王法華の　諸乘一佛乘を成ずる　開顯統
一の　明敎
皇道翼贊　日本精神の　一切文化を朝宗同化せしむる
生成發展の　國性

13 文武一元
本佛の靈威發動して　降魔の力用ある　法華折伏の
敎『文に據れる武敎』
天皇の御稜威發現して　魔軍を膺懲する　神武の國
『德に據れる武國』

14 天業經綸
本佛德化　通一佛土　法界圓融の　大理想
天業恢弘　天下光宅　八紘一宇の　大使命

15 法國冥合　宇內光華　（結論）
本佛の感應に出づる
天孫降臨　寶祚無窮の神國は
轉輪聖王　四海統治の聖國なり

（二）次に、法華經と大日本國との　傳來的因緣とは何であるか。これを一言にして言はゞ
本佛感應の豫言的國土　といふべきである。卽ち
本佛釋尊が　法華經に於て　この　大乘純圓　醍醐一實の妙
法華經なる敎の　純粹に弘まるべき　時　處　その法華經
の行者　弘通の實情等々を　大覺豫言せられたるのみたら
ず、
佛滅後に於ける　佛法弘通　なかんづく　法華經弘通の　諸
菩薩　論師人師　智者學匠等の　高僧名德が　また　この
法華經の弘まるべき　時處因緣等を　縱橫に　先覺讖記せ
られたのである。まづ
本佛の說法たる　法華經の本典に於ては
序品第一よりして、世尊が安詳として　法華三昧の禪定に入
りたまへる時、まづ　その眉間白毫相の光明が　恍として
東方萬八千の世界を照す
といふところより始まりて、この妙法華經は　至る所ま
づ東方に緣厚く、しかのならず
釋尊は日種、法華經は日の理想、特に　敎義に於ては　佛敎
中　唯一の　光明緣起　卽ち　本佛無始常住常照の佛界緣
起を光顯し、而て
大日本は　天照大神を國祖とする　日の本つ國　であるので
ある。
（されば日蓮聖人の日は　釋尊と法華經の日　なると共

に　日本の日　を表すのである。）更にまた
化城喩品に於ても、まづ　東方の諸天が　大通智勝佛の光明
に照されて　その瑞相に　驚愕し　讃歎し　隨喜して　佛
のみもとに來詣し　以て　無上の妙法華經を說きたまへ
と勸請する　のであり、また
陀羅尼品に於ても、まづ　東　北　二方の　護世護國の諸天
善神が　この法華經流布の國土の　守護を發誓するあり、
またこれに先立つ
妙音品に於ても、本佛顯本の最大事を宣說せられたる　虛空
會の了りたる　後の靈山會に當り、まづ　東方より　妙音
菩薩が　この本佛釋尊の御前に來詣し　十方よりの如來使
の魁として　代表として　釋尊に無上絕對の敬意を表し
合掌　禮拜し　恭敬　供養　尊重　讃歎して　釋尊と法華
經の大恩に報じ、また更に尙ほも益々報ぜむがために　自
己の　善根を修し　功德を積み　神通の力用を得たるは
一に全く　世尊と法華經の威德によるものなることを表白
し　しかも　かるが故に　その現一切色身三昧の神通力を
以て　この法華經を弘めて　衆生を濟度せんことを誓ひ
以て卽ち　いはゆる報佛供法の眞精神を表すあり、最後に
普賢菩薩勸發品に於ても、東方より　普賢菩薩が　釋尊の御
前に來詣して　再び　この法華經の大綱を總括受持すべき
御說法を　請ひたてまつれば　世尊は哀愍納受したまひ
て　こゝに乃ち　再演法華の敎詔となり、普賢菩薩は　謹
んでこれを受持して　自らまた　この法華敎と　法華經の
行者と　法華經流布の國土とを　守護せむことを誓ふあ
り、
是の如きは皆、處　に約して　東方の緣　すこぶる深く厚き
を陳べたものであるが、次に
時　（乃至　處）の因緣　に約しては、
勸待品に云く
濁劫惡世中
藥王品に云く
我が滅度の後　後の五百歲の中に　廣宣流布して　閻浮提に
於て　斷絕せしむること無けん
勸發品に云く
如來の滅後に於て　閻浮提の內に　廣く流布せしめて　斷絕
せざらしむ　等々
佛讚　赫々たり明々たり
次に　佛滅後に於て　佛敎弘通の諸先覺の　論釋等に留めら
れたる　豫言を擧ぐるに
彌勒菩薩の　瑜伽論に云く
東方に小國あり　其の中　唯　大乘の種姓のみ有り
僧肇の　法華經の記に云く
大師須梨耶蘇摩　左の手に　法華經を持し　右の手に　鳩摩
羅什の項を摩でゝ　授與して云く、『佛日西に入つて　遺
耀終に東に及ばむとす　此の經典は東北に緣あり　汝愼ん
で傳弘せよ』と
天台大師　云く
後の五百歲　遠く妙道に沾はむ
妙樂大師　云く
末法の初　冥利無きにあらず
行滿和尙　傳敎大師に語つて云く
昔　智者（天台）入滅の時　滅後三百年　我が法　東國に傳は
らむと、祖讖虛しからず
遙式　云く
始　西より傳ふ　猶ほ月の生ずるがごとく　今また　東より
返る　猶ほ日の昇るがごとし
聖德太子　云く
佛法は神史の玄扉を說く
法華經は鎭護國家の妙典なり
日本は大乘相應の地なり
傳敎大師　云く
代を語れば　則ち　像の終　末の初、地を尋ぬれば唐の東
畿の西、人を原ぬれば　則ち　五濁の生　鬪諍の時なり。
經に云く　如來の現在すら猶ほ怨嫉多し　況んや滅度の後
をや　と、此の言　良にゆえ有るが故に
正像　稍過ぎ已つて　末法　太だ近きに有り、法華一乘の
機　今正しく是れ其の時なり、何を以て知ることを得ん、
安樂行品に云く　末世法滅の時に　等云云
（三）かくの如く　佛祖　並びに先哲の幾多の豫言せられた
る　末法の時代　東方の一國、その傳來の因緣を遂うて
而て
かくの如き　本質的大因緣ある　靈國大日本に
日蓮聖人は　豫讖虛しからず　奈緣應生し、特に法華經にの
み　ひとり豫言せられたる　本化上行菩薩として出現し、
當時の　佛法の現狀　國家の現狀　國際世界の大勢を　洞
察し、特に　法華經に　佛讖明かなる　弘經の方軌に順つ
て、
敎　機　時　國　序　の五大方面より　具さに　宗敎宣揚
の　規範方式を　考察し、卽ち
敎　に就ては、佛法の敎理の淺深　權實　より批判して　眞
實深高の法華經に來り、進んで　統一の敎義を　こゝに確
立して　中心歸趣を示し、繼つて　佛敎の全體を開顯し、
更に　俗諦を開會して　世出二門　對絕兩善を　一貫し、
乃至　全人類文明を　擧げて統一する　一大佛乘の敎綱
及び　敎權を　樹立發揚し、
機　に就ては、衆生の宗敎心理　萬差別して　性質欲求各々
不同なるも、今日の　我が日本國民は　まさしく佛陀在世

の砌　法華說法の時と同じく　一同に　純圓にして　醍醐
一實の法味を嘗むべき　法華本門の直機なりとし、
時　に就ては、佛滅後　正像末の三時　五箇の五百歲あり、
今は　末法にして　第五の五百歲に當り、しかも　今こ
そ　佛教の眞實義たる　開顯統一主義の　興立し廣布すべ
き時　卽ち　如來の本懷の　滅後に於て　最も暢達すべき
時なりと斷じ、
國　に就ては、小乘　大乘　大小兼雜　等の諸國あるも、我
が日本國は　一向に　純大乘の靈國なりとし、
序　に就ては、敎法流布の前後に　進化の階梯ありて、小乘
權大乘　實大乘の中に於ても　法華經迹門　より遂に　本
門の大敎に進みて　その純粹に弘まるべき順序なりと　明
斷し、
この　五綱の敎判を　綜合　大觀して　據つて以て
一大正法たる法華經を　建立弘通し　以て佛敎を統一し、更
に　一切の思想文明を統一し、特に　我が日本國體を開顯
して　その深遠微妙の意義を發揮し、以て　法國冥合の大
理想を敎へ　四海歸妙の實現を誓願し、而て　この一大正
法の　敎義的大成たると共に　その宗敎的實踐規範として
は　こゝに
三大秘法　を開出して、卽ち
本門の本尊　を顯發建立し、無始盡十方遍滿の　本覺本佛の
實在と　その妙用救護を敎へて　人類文明の最高中心　法
界絕對の統一的大理想を光顯し、ひるがへつて　我等人
類　乃至　法界一切の生類の　また同じく　この最大の靈
格を　開發顯現するの　大目的を唱道し、進んで
本門の題目　を行じて　我等をして　この大本尊に歸入融合
して　以て　その絕對靈格を顯現すべき　信仰修行の最勝
道を開示し、かくて卽ち
本門の戒壇　を我等の己心に建立し　その本尊より授與せら
るゝ　戒體を受持して　以て個々人格の靈奧を　本尊の來
臨影響せらるべき　一種の寂光の淨土となすのみならず、
更に世界的規模における　大戒壇を　神國大日本に建立
し　かゝる閻浮第一の大本尊を奉安して　この本尊に顯さ
れたる　人生至高の價値を　遍く全人類に　認識體驗せし
め　かくて　人類文明の現實界に於ける　その歷史の意義
の終局　否　人類のみならず　梵天帝釋等も　來下して
遵奉すべき　いはゆる　神人同歸の　大道義的統一の　最
高權威處　となすべく、こゝに
我が大日本帝國を　世界人類の中心國家として、以て大聖釋
尊の理想せられたる　輪轉聖王四海德化の靈力を　確認
し、進んで　立正安國　四海歸妙の　大誓願を發し、これ
を實に我國家の願業となすべく　又これを卽ち　門下後昆
の我等法孫に遺命儆訓しつゝ　遙かに　賢皇聖主の御代を
囑望せられたのである。實に雄大無比なる　國家的　世界
的規模であるのである。
かくの如きものが　法華經と大日本國との　發揚的因緣であ
つて、
一言にしてこれを言はゞ
本佛感應の統一的國家　といふべく、卽ち　その本質的因緣
に於て　本佛應現の妙用に出づる　佛道的國體　法華經的
國體たる　大日本國が　まさしく法華經の傳來的因緣を俟
つて　その神隨を開顯せられ、進んで　その佛道的本質を
現實事實に顯現して　佛敎と皇道　法と國とが　冥合する
に至るべく、かくて　統治經綸道に於ける　佛道的發現の
絕對國家が　宗敎的救濟道に於ける　大覺成佛の絕對理想
と抱合一如し　いはゆる神佛二敎がこゝに全く合體して
皇道日本は　常に同時に　佛道日本となり、更に大いに
人類世界に　この大理想を擴大し　八紘を掩うて宇となす
神人同歸の世界的中心なる　歷史的大發展を成し遂ぐるに
至らば、こゝに卽ち　現世の絕對權と　靈界の至上權と
が　融合して　皇國は宇內に君臨する　一大統一的靈國と
成るべき所以である。
要を以て　これを言はゞ
1　本化出現　正法樹立　立正安國　法國冥合の根柢
2　本尊顯發　文明中心　一天四海皆歸妙法の理想
3　戒壇建立　道義統一　人類救濟　世界一家の誓願
かくして　久遠悠久の太古より　人類歷史の上に顯れ來り
しかもその　隆替常なき人文興亡の史蹟の外に卓立して、
萬古永劫の歩みを經來り　また永劫に歩まんとする　二個
の絕對の大事實と大豫言とは、各々その絕對の權威を發揚
しつゝ　しかもその內面に於て　根本的融合統一を成し遂
げ　眞乎　靈肉兩面に於ける　人類永遠の慶福を齎すに至
るであらう。
日蓮聖人
1　觀心本尊鈔　に云く
此の菩薩　佛勅を蒙つて　近く大地の下にあり、正法に未
だ出現せず　末法にも亦出で來らずんば　大妄語の大士な
り、三佛の未來記も亦泡沫に同じ、此を以て之を惟ふに
正像に無き　大地震大慧星等を出來する、此等は　金翅鳥
修羅龍神等の動變に非ず、偏へに　四大菩薩出現せしむべ
き　前兆なる歟、天台云く　雨の猛きを見て龍の大なるを
知り　花の盛りなるを見て池の深きを知る、妙樂云く　智
人は起りを知り　蛇は自ら蛇を知る　等々
2　又云く
當に知るべし　此の四菩薩　折伏を現ずる時は　賢王と成
つて　愚王を誡責し、攝受を行ずる時は　僧と成つて　正
法を弘持す

(註)つら〳〵おもんみるに、我國近世の歴史に於て明治天皇より 今上陛下に至るまで、その維新開國の 世界的舞臺に登上してより 日清 日露の兩戰役を經て 乃至 滿洲事變 滿洲帝國建設 國際聯盟脱退 及び目下の 支那事變等に際し、常に 天佑神助のもと萬世一系の皇室の御稜威發現し 神武の靈力發動して、愚王を誡責し 魔軍を懲懲し、進んで 天祖肇國 天孫降臨 神武東征以來の 皇謨たる 天業を廣く全世界に布かんと 今やまづ アヂア大陸に これを恢弘經綸しつゝあるは、正に 此の 本化の大菩薩の 菩薩行たり 然り 本佛感應の靈源より發する その如來行たらざるなきか、先聖の遺訓 靈智の豫讖 赫々たり 明々たり 千古の鐵案 まさに鏘々の響を發するあるを見ん。

3 聖人知三世事 に云く

聖人と申すは 委細に三世を知るを聖人と云ふ、儒家の三皇五帝並びに三聖は 但だ現在を知つて過未を知らず。外道は 過去八萬未來八萬を知れば 一分の聖人なり。小乘の二乘は過去未來の因果を知ること外道に勝れたる聖人なり。小乘の菩薩は 過去三僧祇の菩薩なり。通教の菩薩は 過去に動喩塵劫を經歴し、別教の菩薩は 一々の位の中に 多俱低劫の過去を知る。法華經の迹門は 過去の三千塵點劫を演說す 一代超過 是れなり。本門は 五百塵點劫 過去遠々劫をも 之を演說し 又 未來無數劫の事をも 之を宣傳す。之に依つて之を案ずるに 委しく過未を知るは 聖人の本なり。教主釋尊は 既に 近くは 去つて後三月の涅槃 之を知ろしめす、遠くは 後五百歲の廣宣流布 疑ひなきものか。若し爾れば 近きを以て遠きを惟ひ 現を以て當を知らん、如是相 乃至 本末究竟等 是なり。後五百歲には 誰人を以て 法華經の行者と 之を知るべきや。予は未だ我が智慧を信ぜず、然りと雖も 自他の叛逆侵逼あり、之を以て 我が智を信ず、敢て他人の爲めに非ず、又 我が弟子等 之を存知せよ、日蓮は是れ法華經の行者なり、不輕の跡を紹繼するが故に。いはゆる 正嘉の大地震 文永の長星は 誰が故ぞ、日蓮は一閻浮提第一の聖人なり、我が弟子仰いで之を見よ

4 開目鈔 に云く

法華經の第五卷 勸持品の二十行の偈は 日蓮だにも此の國に生れずば 殆ど世尊は大妄語の人 日蓮なくば 此の一偈の未來記妄語となりぬべし

5 顯佛未來記 に云く

我が言は 大慢に似たれども 佛記を扶け如來の實語を顯さんが爲なり。然りと雖も 日本國に日蓮を除き去つて誰人を取り出して 法華經の行者とせん。汝 日蓮を誇せんが爲めに 佛記を虛妄にす、豈 大惡人に非ずや。疑つて云く、如來の未來記 汝に相當るとして 但し 五天竺 並びに 漢土等にも 法華經の行者 之れ有るか 如何。答へて云く、四天下の中に全く二つの日無く、四海の內豈兩主有らんや。疑つて云く、何を以て 汝 之を知るや。答へて云く、月は西より出でゝ東を照し、日は東より出でゝ西を照す、佛法も又以て是の如し、正像には西より東に向ひ 末法には東より西に往く。故に 遊式の云く、始め西より傳ふ 猶ほ月の生ずるが如く、今また東より返る 猶ほ日の昇るがごとし。乃至 法華經の第八に云く、如來の滅後に於て 閻浮提の內に 廣く流布せしめて 斷絕せざらしめむ等云云。問うて曰く、佛記既に此の如し、汝が未來記は如何。答へて曰く、佛記に順じて之を勸ふるに 既に 後五百歲の始に相當れり、佛法必ず東土の日本より出づべきなり。

6 撰時抄 に云く

佛眼を藉つて時機を考へ 佛日を以て國土を照せ

その時に智人一人出現せん……前代未聞の大闘諍 一閻浮提(全世界)に起るべし。其時 日月所照の四天下の一切衆生 或は國を惜み 或は身を惜む故に 一切の佛菩薩に祈を掛くとも しるし無くば、彼の憎みつる一人の小僧を信じて 無量の大僧等 八萬の大王等 一切の萬民 頭を地につけ掌を合して 南無妙法蓮華經と唱ふべし。例せば法華經神力品の十神力の時、十方世界の一切衆生 一人もなく娑婆世界に向つて 大音聲を放ちて 南無釋迦牟尼佛南無釋迦牟尼佛南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と 一同に叫びしが如し

如來の明教に云く

その時に 東方の諸の小國の王は 大王の至れるを見、金鉢を以て銀粟を盛り 銀鉢に金粟を盛り 來りて王の所に趣き 拜首して白して言さく、善來 大王よ 今此の東方の土地 豊樂にして 人民熾盛なり 志性仁和 慈孝忠順なり。唯だ願くは聖王よ 此に於て治正したまへ。我等まさに左右に給使して 所當を承受すべしと。

時に轉輪大王は 小王に語つて言く、止みぬ止みぬ 諸賢よ、汝等は則ちこれ 我を供養しをはれり。たゞまさに正法を以て治めて 偏枉せしむること勿るべし、國內をして 非法を行ずること有らしむる勿れ、此を即ち名づけて 我れの所治と曰ふと。

時に諸の小王 此の教を聞きをはつて 即ち大王に從つて諸國を巡行す。東海の表より 次いで南方西方北方に行き、輪の至る所に隨つて 其の諸の國王は 各々國土を獻すること 亦東方の諸の小國の比の如し。

時に轉輪王 既に金輪を隨へて 周く四海をめぐり、道を以

て開化し　民世を安慰しをはつて　本國に還りたまふ。時に金輪寶は　宮門の上に在りて　虛空の中に住す。』

謹んで案ずるに　輪寶とは猶ほ『三種の神器』の如き乎。

更にまた　如來の明經に說いて云く

聖王　東海より度つて　古聖王の道に乘じて　南海に至る、南海を度つて　西海に至り、古昔聖王の道に乘じて　西海を度つて　北海に至る。南西北方の諸の小國の王　奉迎し啓請したてまつること　亦東方に廣く說くが如し。

是に於て　金輪寶は　聖王に從隨して　北海に度り、還つて　王宮正治の殿上に至り　虛空の中に住す。是を　轉輪聖王　世に出興し　金輪寶　世間に現ず　と爲す。』

この如來の明教を拜して　欣躍指くところを知らず。曾て日蓮聖人は「瑜伽論」と「法華顯經の記」を讀んで　喜悅全身に溢れ『兩眼瀧の如く　一身悅びにあまねし』と　言はれたることであるが、今この如來の經文を拜すれば、如來の精神は　現實の人の世を濟度するに在るや　すこぶる明白にして、而も　その輪王の　東海の表より發して　南西北方に周行し、然る後に　その本國に還りて　金輪寶はその宮殿の上に在つて空中に住す　といふに至つて　全身の喜悅非ゆること能はず、……

輪王統治の理想　四海德化の實現　これ果して　何れの國の天職なるか、如來懸讖の明文　今現に昭々乎として　人文史を無して居る。苟くも志士仁人を以て任ずる者　此に於て默識神通するところ無くんばあらず矣。

如上　大日本國體と佛教　皇道と法華經日蓮主義　の　本質的　傳來的　發揚的　三大因緣を　綜合大觀するに、まさしく　我が皇國は　本佛の宗教　を　宣揚し　樹立し　實現し　成就すべき　靈國にして　靈力を有つ　『本佛感應の聖國』である。

天祖肇國　天孫降臨の淵源を有する　日本民族は銘記せよ

久遠太古の根源に遡り　未來悠久の永遠に亘つて

神國大日本が　本佛の大宗教を奉じ　その常住の靈光と一如し　その感應の靈力と合體して　兩々絕對の權威を發揚しつゝ　現在以後　人類歷史の將來に君臨すべきは　これぞ先天の約束であり運命であり

天業經綸の大使命である。

南無妙法蓮華經

往昔　日蓮大士が　靈峰富士に『法華經』を埋められたるの　故智に倣ひ、現時日蓮門下有志の士が、その名もゆかりある　天下の名峰　八ケ嶽に『八卷きのみ法』を埋めて、不朽の靈瑞としたる　その東麓に當る　松原湖畔山水秀麗の高原に、朝夕　雲海と戲れ　雲表に聳え立つ豪宕蜿蜒たる　靈嶽の雄姿を仰ぎ、遙かに思を　大陸の戰場に馳せ、顧つて正に皇紀二千五百九十九年なる　我が祖國日本の史上に於て、實に今日の如く　民族意識　祖國の理想　八紘一宇の天業的大使命が　我が日本民族の精神界裡に　擧節高潮せらるゝこと　實に今日より高きは　未だ曾て之有らざるを思ひ、しかも省て　更に同時に　法界無上の眞道たる　本佛實在の大法が　必ずや常に　これに伴ひこれに加らざるべからざるを痛感し、一片耿々の志　遙んで　皇威宣揚　資祚無窮を祈り奉り　皇軍將兵の辛苦と武運を念ずると共に　更に　大法光顯　妙道流通を　佛祖照鑑のもと　至心に祈願懇禱し奉り　敢て『昭和の立正安國論』の一分に擬せんと　この稿を成す

維時　昭和十三年　夏秋の交　越えて　今再び　十四年　中夏の節

法華經八嶽の東麓に記す

朝まだき　篤の音に勵まされ
ふしどを蹴つて　我は出で立つ　（續く）

暑中御伺

昭和十四年炎懊

統一誌編輯同人

追孝第一義

礒部滿事

盂蘭盆と申候事は佛の御弟子の中に目連尊者と申して、舍利弗にならびて智慧第一神通第一と申して、須彌山に日月のならび、大王に左右の臣の如くに在せし人なり。此の人の父をば吉懺師子と申し、母をば青提女と申す、其母の慳貪の科によつて餓鬼道に墮ちて候しを目連尊者のすくひ給ふよう事起りて候。其因緣は母は餓鬼道に墮ちてなげき候けれども、目連は凡夫なれば知ることなし、幼少にして外道の家に入り四韋陀十八大經と申す外道の一切經を習ひつくせども、未だ其母の生所を知らず。其後十三の歳、舍利弗と俱に、釋迦佛にまいりて御弟子となり、見惑を斷じて初果の聖人となり、修惑を斷じて阿羅漢となりて三明を備へ六道を得給へり。天眼を開いて三千大千世界を明鏡の影の如く御覽ありしかば、大地を見透し三惡道を見る事氷の下に候魚を、朝日に向ひて我等が透し見るが如し。其中に餓鬼道と申すところに我が母あり、飲む事なし食ふ事なし……あまりの悲しさに大神通を現じ給ひ、飯をまいらせたりしかば、母よろこびて右の手には飯を握り、左の手にては飯を陰して口に押入れ給ひしかば、如何んがしたりけん飯變じて火となり、やがて燃えあがり、母の身のこころこと燒け候ひしを目連見給ひてあまりあわてさわぎ大神通を現じて大なる水をかけ候しかば、其水薪となりていよ〳〵母の身の燒け候し事こそあはれには候しが、其時目連自らの神通叶はざりしかば、走りかへり須臾に佛にまいりて歎き申せしやうは、「我身は外道の家に生れて候しが、佛の御弟子になりて阿羅漢の身を得て、三界の生をはなれ三明六通の羅漢とはなりて候へども、乳母の大苦をすくはんとし候に、かへりて大苦にあはせて候は心憂し」と歎き候しかば、佛說て云く、「汝が母は罪深し、汝一人が力及ぶ可らず、又何の人なりとも天神、地神、邪魔、外道、道士、四天王、帝釋、梵王の力も及ぶ可からず、七月十五日に十方の聖僧をあつめて百味飲食を調へて母の苦は濟ふべし」と云云。目連佛の仰せのごとく行ひしかば、其母は餓鬼道一劫の苦を脫れ給ひきと、盂蘭盆經と申す經に說れて候。其によて（佛）滅後末代の人人は七月十五日に此法を行ひ候なり、此は常の如し。

日蓮案じて云く、目連尊者と申せし人は十界の中に聲聞道の人、二百五十戒をかたく持つ事石のごとし、三千の威儀を備へてかけざる事は十五夜の月の如し……かゝる聖人だにも重報の乳母の恩報じがたし、剩へ報ぜんとせしかば大苦を增し給ひき……詮ずる所は目連尊者が乳母の苦をすくはざりし事は、小乘の法を信じて二百五十戒と申す持齋にてありし故ぞかし。されば淨名經（一名維摩經）と申す經には淨名居士と申す男、目連房をせめて云く、「汝を供養する者は三惡道に墮つ」云云。

文の心は二百五十戒の尊き目連尊者を供養せん人は、三惡道に墮つべしと云云。此又唯目連一人が聞く耳にはあらず、一切の聲聞乃至末代の持齋等が聞く耳なり。此淨名經(維摩經)と申すは、法華經の御爲には數十番の末の郎從にて候。

詮ずる所は目連尊者が自身の未だ佛にならざる故ぞかし、自身佛にならずしては父母をだにも救ひ難し、況や他人をや。然るに目連尊者と申す人は、法華經と申す經にて正直捨方便とて、小乘の二百五十戒立どころに投捨てゝ南無妙法蓮華經と申せしかば、やがて佛になりて名號をば、多摩羅跋栴檀香佛と申す、此時こそ父母も佛になり給ふ。故に法華經に云く「我願既に滿ち衆の望も亦足りぬ」云云。目連が色身は父母の遺體なり、目連が色身佛になりしかば、父母の身も亦佛になりぬ。……目連尊者が法華經を信じ參らせし大善は、我身佛になるのみならず父母佛になり給ふ、上七代下七代　上無量生下無量生の父母等存の外佛となり給ふ、乃至子息夫妻所從檀那無量の衆生三惡道を離るゝのみならず、皆初住妙覺の佛となりぬ。故に法華經の第三に云く「願くは此の功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん」云云。

(給遺一五九四)

盂蘭盆會と父母追孝と法華經大善の關係が、この日蓮聖人の御書に依つて充分に領解されることと思ふ。

帝都では新暦の七月がお盆として既に濟されたけれ共、全國的には八月が一般にお盆で棚祭りが營まれる、そこに幼い子供達も親達の手に引かれて菩提寺に詣で、祖先のお墓は勿論親戚知友のお墓詣りをする處に日本人たる强味がある

と思ふ。即ち道義の大本だから……學校で祖先を崇べと教へられる時に居眠りする生徒も、お華と線香を持たされて、盛儀を整へた父親や母親が、生ける人等に仕へるやうな態度で至誠を籠めた展墓の姿こそ永久に小さい腦裡から消ゆるものでない、人殺をしたり强盜の犯人でさへもが、親達の墓前に詣でた時、自らの佛性躍動に驀然として改悔の涙にむせぶのである。

一方檀那寺のお坊さんも、かゝる機會に棚經だといつて檀家廻りをして、只お經料を貰ふこと丈けでなく、寧ろ其家庭の信仰狀態を察知し、佛檀莊嚴の正邪を教へ、懇切に化導して行きたいものである。大衆は概して宗教的の訓練が與へられてないから、實際上御本尊の奉安に就ても粗略であつたり雜亂勸請に陷り易いもので、知らざるが故に冒した誘法罪とはいへ、又教へざる者も共同責任ではないかと想ふと恐ろしい事である。念佛門徒や、基督教徒が人は罪惡の塊りだといふが、觀方に依ればその通りである、勿論全的の表現ではないが三惡の身である。それは世間的にも雜多の罪惡を釀して居る。此等の罪惡は眼前のことであるから誰れにでも分別はつく。併し出世間的の教法上のことには證果の大僧正さへも尙ほ辨へ難いものであるから、まして凡夫に於ては殆んど知り難い、その解り難い誘法罪が罪の中で最惡だといふのだから至極面倒になる。日蓮聖人の折伏行はこゝに徹したものでないか。晩年秋元抄に「悲ひ哉、我等誹謗正法の國に生れて大苦に値はん事よ、たとひ謗身は脫ると云ふとも、謗家・謗國の失如何せん。謗家の失を脫れんと思はば、父母兄弟等に此事を語り申せ、或は惡まるゝ歟、或は信ぜさせまいらする歟。謗國の失を脫れんと思はば、國主を諫曉し奉りて死罪歟、流罪歟に行はるべきなり。我身命を愛せず但無上道を惜むと說かれ、身は輕く法は重し、身を死して法を弘むと釋せられしは是なり。過去遠遠劫より

今に佛に成らざりける事は、か樣の事に恐れて云ひ出さざりける故なり、未來も亦復是の如くなるべし」と、法華經を佛說の通りに信じ貫くことの如何にも困難であるかを少しは推察出來る、成る程資塔品の六難九易とは能くも穿たれたお經文である。誹謗正法の人は大地の塵の樣に多く、信ずる人は爪上の土の如しとは全く首肯される。南無妙法蓮華經とお題目を唱へつゝも地獄に墮つる人の多いことも、さこそと思へば甚だ寒心に堪えない。

法華の堅凝りは排他的だといふ人達は、先づ宗教そのものを冷靜に研鑽して戴きたい。宗教の本質も辨へないで、道德一點張りで行かうとしたり、信心は何でも結構だといふやうな中途の議論でなく、モット思想をズーッと高く伸して、深い確固たる基礎に立たねば、折角武力に於て世界第一であつても、精神文化が伴はなかつたならば、その將來は知るべきのみである。日蓮聖人の信仰が、排他か包容か開顯か統一かは、少なくも大藏經を通覽してからの討議でないと、枝葉末節の切抜き批難は却て世を毒することになつて愼しむべきことと思ふ。第一義の正信ない國家は永久の興隆は望めない、印度、支那、朝鮮等は何を示教してゐるか深思すべきである。

日蓮聖人の信仰が、個人の安心立命に目標をおかれた通佛教的だと思ふと大間違ひである。川合清丸全集にも、佛教は解脫門だと論じてあるが、それも一部分にはあるけれども解說丈けならば必ずしも佛教に來ぬでもよい。苟も三界の大導師といはれる釋尊の明教が單に個人解說に滿足するだけならば、人天の大導師と申し難い、妙覺の佛樣とは左樣な淺い狹い極限された教を說くべく出現されたものではない、モーこれ丈けでも佛教の本筋には來て居らぬ議論ぢやといふことが知れる、杉浦先生其他は押して知るべしである。爲政家は宜しく法國冥合といふことに重點をおいて戴きたいと思ふ。目蓮尊者が三明六通の阿羅漢果を得られて居てさへもが、維摩居士一言の下に泣かされたのである。況んや凡愚の學者、見思の惑も斷ぜずして佛教を批判せんとする態度からして宜しくない、諸法國なるが故にかゝる大事變も襲ふのだ、これは私共へのよい實物教訓とすべきである。佛弟子中智慧第一と稱せられた舍利弗尊者でさへ釋尊は「汝舍利弗尙ほ此の經に於ては、信を以て入ることを得たり、況んや餘の聲聞をや、其の餘の聲聞も佛語を信ずるが故に此經に隨順す、已が智分に非らず」と教誨されてゐる。

龍樹菩薩は信の十義を述べられた。

一、澄淨の義
二、決定の義
三、歡喜の義
四、無厭の義
五、隨喜の義
六、尊重の義
七、隨順の義
八、讚歎の義
九、不壞の義
十、愛樂の義

日蓮聖人は信を以て壓に代ふべきが、釋尊の御意であると、一念信解、初隨喜を說かれ專ら淨心に南無妙法蓮華經の信念口唱を高調されたことは寔に有難い事であるが、省みてこの淨心信敬がいかにも難事である。文應の昔、日蓮聖人難を脫れ下總中山に在つて百日御說法の際富木さんの一家臣、素は念佛の凝り固り屋で鐘阿彌と稱せられた者、大聖人

のお話を聽き風善薫發して忽ち念佛を案て、正信に歸して二六時中唱題を怠らず寢食さへも廢する程熱心であつたから、大聖人は首題房日唱と授けられたさうだが、淨土宗の時には小鐘を撃つて念佛する習慣があつた、それが唱題に移つて小鐘を廢したから甚だ心の統制がとり難い爲め、ある時、大聖人に白して、鐘の音は心を制して甚だ初心を扶けますが、唱題に亦之を撃つても宜しいでしやうかと伺つた。其時、大聖人は之を聽許されたから大に喜んで小鐘を撃ち續けたといふことが記錄にあることを見て、先師も一心清淨の唱題にはどれ程御苦心されたかを推察し、その容易なものでないことを悟ふ。此の方便として大鼓は極めて有效である。ドンツク法華と蔑視される程大鼓の價値は穢されたことは甚だ惜しむべきである。けれども大鼓に少しの罪科もあるまい、尊卑は人にあるのではないかと思ふ。鼓を撃つたり、鐘を撞いて大法を求めた國王が過去にあつた。それは實に釋尊の因緣話であつたことはあまりに有名なお經文である。寔に眞劍に法を求め、之を永久に受持することは全く至難中の至難である、昔し常啼菩薩は東に大法を請ひ、善財童子は南に法を求め、藥王菩薩は手を燒き、昔明王は頭を刎られたといふことで皆生命がけである。そんな面倒な恐ろしい信心ならばモー此邊で御免かうむると途中で退轉することになれば、それは又大きな罪業となるのである。斯うなれば絶對絶命でどうあつても唯精進あるのみで、恰度現在の日支事變のやうなものなんである。要は「心の固きによりて神の守り强し」である。戰ひは必ず勝たねばならぬ、千萬の强敵を我一人で粉碎し凱歌を奏する者、初めて佛弟子の資格があるのだと仰せられた。されば「日蓮魁けしたり、わたうども二陳三陳つゞけよかし」と、法幢は既に已に遙かの彼方に翻々と飜て居る。「日蓮が弟子檀那臆病にては協ふ可らず」の嚴訓が響いてゐる。護法愛國の丈夫越つて皆歸妙法以つて萬民快樂への理想實現に健闘すべきが、天業の民としての本分であるまいか、夫れには先づ手近い自己の家庭内から始めてほしいものである。日蓮聖人のお言葉に、

凡そ一樹の蔭に宿り、一河の流をくむ事だにも、多生の縁とこそ云ひぬるに、まして況や親となり子となるをや。彼の丁蘭が木をきざみしも、張敷が扇を身にそへしも、孝行の深き故ぞかし。就中外典にも父のみ尊親の義を彖たりと云ふて、父の恩を重くせり、又母の恩淺からじ、其故は先づ母の胎内にをる、最初柯羅邏より出胎の後に至るまで、三十八轉の間坐臥安からず、母を苦しめし事幾くぞや、日を數ふれば二百六十日、月を計れば九月の程ぞかし、況んや胎外に生じては、苦を咽み甘を吐き乾を回らして濕へるに就く、かゝる厚恩を蒙れば身の徒らに月日を送り居て、三途の重苦に沈みたる親の菩提を弔はざらんは淺間敷事なり、爭か諸天惡み給はざらんや、其上多くは子を思ふ故に地獄の重苦を受くる事あり、構へて弔ひても弔ふべきは二親の後生菩提なり。

と、そこに盂蘭盆追孝の第一義を憶念せざるを得ない、事の一念三千の大事とはこゝの謂ではないでしやう歟。

南無妙法蓮華經

記事

本部團報

盂蘭盆會　七月十六日、文應の昔、日蓮聖人立正安國論建白の翌日に、奇しくも事變下の第三回盂蘭盆會を營むことになつた。殊に本年は同信の岩淵中佐が中支戰線から一寸御歸京なつて居るので、御參列を願ひ陣歿諸精靈の御回向御燒香の後、その御體驗談を承つた。三時法要終了後、磯部常任理事の御紹介を以て、岩淵中佐は特に甚暑の中を長時間に亘つて熱心に將兵各位の御奮鬪を話された、そのすべてが耳新しく、滿堂の大衆も流るゝ汗を忘れて聽き惚れた。話さるゝ身には深い追憶が伴ひ、聞く者には大きな感激を覺ゆるのである。あついとか、餓じいとか、眠いとかいふ間は未だ眞劍でない證據と思ふ、第一線に立てば既に生死の外にあつて、五感の働きも普通とは著しく相違するとの事である。これは各自がその仕事に熱中した時にも屢屢體驗することなんで、その作業一段落の場合に始めて渴を覺え、空腹を感じ、グッタリする、即ち眞劍の時は無我夢中ともいふべきなんであらう。かかる皇軍各位の勞苦を偲ぶ時、銃後の者は決して收入が多いからと贅澤は出來ない宜しく獻金もし、貯蓄すべきである。不自由だとか物見遊山などは愼むべきである、特に男女學生生徒の氣風は此際一變すべきである。親達にしても兒童、殊に女の兒の服裝は注意してほしい、太股まで露出して羞かしいとも思はないやうな養育は將來亡國の前徵となる惡習なりと警戒されたい、今の女子教育は禮儀も失せ、羞恥もなく、ヤンキー模倣、支那婦人の眞似に默んでゐるやうにしか受取れない、大和撫子の芳香は消えつゝあると最後に憂國の叫を漏された、中佐の胸中は第一戰將兵の言葉であるまいかと私共申譯ないことである。

五時四十分拍手裡に降壇、甚深の感銘を胸底に藏して夕陽をあびつ散會。

御書講座　毎週火曜日晩の御書講座は、八月休講して九月五日から開かれる豫定。

日曜日清集　八月は日中御休にして、夜分數日連續的に講習會を催すことになりました。便宜御參加御奬め申します。

早朝勤行　毎週月曜日朝五時半より、甚暑克服、正法興立皇道繁榮、謂しては皇軍の武運長久と陣歿者追福の修法が營まれてゐる。參加者多いことは心强い。

福島支部報

七月六日　於高商生徒集會所　吉松、高橋兩先生の御出席を戴き、磯部先生を御迎へして例會を開く。

前回に續き立正安國論大要の御法話あり。立正安國の正しい意味の懇切丁寧な御說明を戴く、而して先生は最後に戰には勝つても若し思想の根本に宗教がなければ、世界文化の建設は望めないと强調された。

七月六日夜　於中村樣宅　日蓮聖人を中心とせる信仰に就ての御法話あり、我々が信仰して行く上に於て、その本尊如何といふ事が最も大切な事であり　日蓮聖人は七月八日我々にその御本尊を御示し下さつた、云々。それから先生には又三歸五戒に就て懇篤な御說明下さつた。御法話後支那事變二周年を迎えての座談會を開き、岩井支部長、高商卒業生、細谷、夏谷兩君の御感想あり、和氣藹々の裡に十時半閉會す。

沼部爲義君の應召

本多上人御令妹の次男爲義君が、去る十五日自分が不圖沼部家を訪れた時、赤紙が屆けられ二十日午前九時〇〇聯隊へ入營さるゝことになつた。

爲義君は學窓を出られると直ぐ待ちうけたと謂はんばかりの待遇で、今の自動車工業の前身であつた大森の方の工場に通勤されてゐたが、先年から川崎の方の新工場へ移り工務課勝入製品係主事に榮進し、三十二歲の英氣發剌、しかも沈毅精勤の傍、在鄕軍人會長に推され、銃後の守に努力しつゝある工兵少尉である。

今や事變は彌々露骨化して、露の思想戰と英の經濟戰が展開し極めて複雜微妙な關係になつて來た、單に武力ばかりで勝敗は決しかねる重大な國際情勢である。併しかうした事柄が七百年前既に大聖日蓮に依つて絕叫されてゐた、ことは、その卓見驚くべきである、有難いことには爲義君は正法信仰の家に生れ、その親達は　本多上人と御兄弟篤信のお方を悲母とし、名譽ある帝國軍人の嚴父を戴いて居られるから餘程果報のよい身分である。幾多將校中に於ても特に肇國の理想を敎法上に開顯した根本善に基いて、有史以來の聖業貫徹に邁進すべき强盛の大信力、奮迅力、志願力に終始されんとする御決意を承つて御同慶に堪えない。希くは　佛祖三寶の加被を至心に念願して共の壯途を送る。

――一四、七、二〇、滿事合掌――

團費誌料寄附金及維持費領收（自六月二十一日至七月二十日）

一金五　圓也　萩　林宇吉殿
一金參　圓也　岡山縣　金森義雄殿
一金貳圓五拾錢也　東京　細谷宗司殿
一金參拾　圓也　同　横山正三殿
一金壹　圓也　同　和泉起世殿
一金貳圓五拾錢也　同　宮村なる子殿
一金壹圓貳拾錢也　京都　加賀山幾殿
一金貳圓五拾錢也　東京　平井一正殿
一金五　圓也　同　山崎林太郎殿
一金參　圓也　淡路　吉岡正太郎殿
一金五　圓也　大阪　德永熊彌殿
一金貳圓五拾錢也　福島　岩井鷲殿
一金貳圓五拾錢也　東京　佐藤大太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　靜岡　大越千代子殿
一金拾　圓也　東京　何某殿
一金壹圓五拾錢也　名古屋　坂野千代殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　福原修殿
一金貳圓貳拾錢也　同　總引綽殿
一金貳　圓也　東京　藤崎勘三郎殿
一金拾　圓也　靜岡　福岡登良雄殿
一金五　圓也　新京　皿井巢殿
一金參　圓也　東京　小林春次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　同　青山信市殿
一金五圓卅五錢也　布哇　横井シナ殿
一金壹圓貳拾錢也　福岡縣　秋山照代殿
一金貳圓五拾錢也　横濱　望月宣諦殿
一金五　圓也　東京　鈴木うた子殿
一金貳圓五拾錢也　千葉縣　川村善助殿
一金貳圓貳拾錢也　山形縣　遠藤豊次郎殿
一金參　圓也　東京　田中久殿

右難有入帳仕候也

（葉書の領收報告は節約させて戴きますが、特に御入用の方は御書添へ下さいますれば差上ますこと勿論です。）

財團法人統一團會計

平素は兎角御無沙汰勝に流れ申譯ありません、暑威御障りございませんか、小生事なく護法の御手傳をさせて頂いて居ります。又先日來司法保護委員を囑託されましたから宜數御指導お願申上ます。

右乍略儀紙上御挨拶迄。南無妙法蓮華經

礒部滿事

信仰報國

第二回夏期講習會豫告

講習要綱

期間 昭和十四年八月二十日より同二十三日迄四日間
毎晩六時三十分修法、講話七時——九時

場所 本部講堂

科目講師 （都合に依りて若干の變更を見ることあるべし）

第一日 常非常時に際して　池田新一氏
如來壽量品綱要　山口智光氏
第二日 經濟界の今日及將來　上田辰卯氏
立正安國論略講　和賀義見氏
第三日 日蓮門下各派概論　中村清一氏
我統一國の使命　河合陟明氏
第四日 軍人と日蓮主義　岩淵經夫氏
本多上人の高風　磯部瀧事氏

以上

主催 財團法人 **統一團**

校量數珠功德經

第十套の七

大唐天竺三藏寶思惟譯

其の數珠法は應に是の如く有るべし、須らく當に受持すべし。若しは鐵を用て數珠を爲さば誦捐一徧、福を得ること五倍なり。若し赤銅を用て數珠を爲さば誦捐一徧福を得ること十倍なり。若し眞珠珊瑚等を用て數珠を爲さば誦捐一徧福を得ること百倍なり。若し木槵子を用て數珠を爲さば誦捐一徧福を得ること千倍なり。若し諸佛の淨土及び天宮に往生を求めば應に此の珠を受くべし。若し蓮子を用て數珠を爲さば誦捐一徧福を得ること萬倍なり。若し因陀羅佉叉を用て數珠を爲さば誦捐一徧福を得ること百萬倍なり。若し烏嚧陀羅佉叉を用て數珠を爲さば誦捐一徧福を得ること千萬倍なり。若し水精を用て數珠を爲さば誦捐一徧福を得ること萬萬倍なり。若し菩提子の數珠を爲さば或は用て捐念し、或は但だ手持し數誦一徧せん其の福無量にして算數す可らず、校量すべきこと難し。

校量數珠功德經　畢

曼殊室利呪藏中校量數珠功德經

第十套の七

大唐三藏沙門釋義淨譯

其の珠體種種ありて同じからず、若し鐵を以つて數珠を爲さば誦(じゅ)捺一徧福を得ること五倍なり。若し赤銅を用て數珠を爲さば誦捺一徧福を得ること十倍なり。若し眞珠珊瑚等の寶を用て數珠を爲さば誦捺一徧福を得ること百倍なり。若し總子を用て數珠を爲さば誦捺一徧福を得ること千倍なり。若し因陀羅佉叉を用て數珠を爲さば誦捺一徧福を得ること百萬倍なり。若し烏嘘陀羅佉叉を用て數珠を爲さば誦捺一徧福を得ること百億倍なり。若し水精を用て數珠を爲さば誦捺一徧福を得ること千億倍なり。若し菩提子を用て數珠を爲さば或は用て捺念し、或は但だ手持し誦數一徧なるも其福は無量にして算計す可らず、校量す可きこと難し。

曼殊室利呪藏中校量數珠功德經　畢

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價 送料共	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	仝	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		仝	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		仝	金貳圓九拾錢
眞理の基礎に樹つ佛教の信仰		仝	金拾五錢
法華經要品		仝	金五拾錢
日生上人レコード(四面)		仝	金參圓廿五錢
日蓮聖人		仝	金拾錢
本尊意識に就て		仝	金貳拾錢
釋尊の八相成道		仝	金貳拾錢
法華經の心髓		仝	金壹圓五拾錢

曹洞宗管長 河合陟明著 本多日生上人	特價 送料共	金壹圓七拾錢
勤行作法	仝	金拾錢
佛教の心髓	仝	金壹圓
皇道と日蓮主義	定價 送料共	金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ十七

財團法人 統一團出版部

振替東京九四二〇番

一冊	金貳拾錢 送料壹錢
一定價 半ケ年	金壹圓貳拾錢
一ケ年	金貳圓貳拾錢

送料共

注意

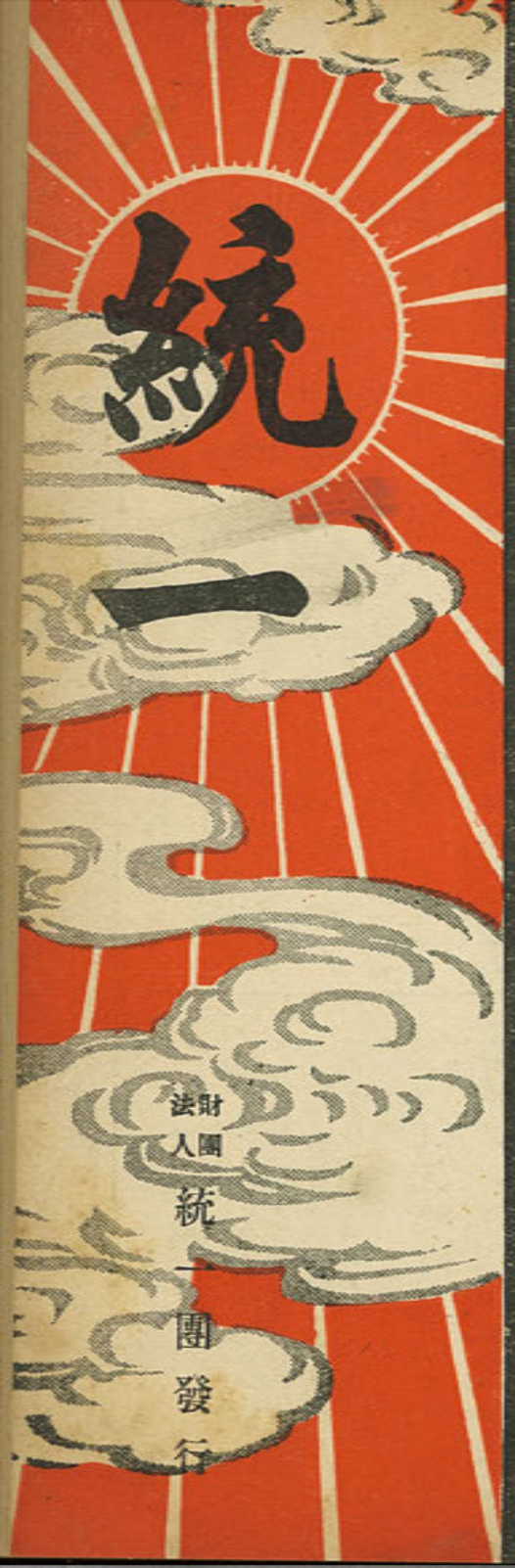
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十四年七月二十七日印刷納本
昭和十四年八月一日發行
（第五百三十三號）

東京市小石川區音羽町六ノ十七
編輯兼發行人 礒部滿事
東京市四谷區內藤町一
印刷人 山田英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ十七
發行所 財團法人 統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



目次

佛教の根本と其の應用（其十三）……本多日生
開目鈔講話（第三十講）……小林一郎
我統一團の使命……河合陟明
武器なき戰士の歌……八木沼丈夫
近詠數首……大八木義雄
記事
○本部團報　講習會テキスト
○團費誌料寄附金及維持費領收
大藏經要義續篇（其十七）……本多日生

第四十四年九月號

14/10.3